525
167

七五三龜吉著

今昔夜話

生活味

全

東京

町田書店

大正
13. 5. 7
内交

525-167

序

時代の推移は風俗慣習を變遷せしむるのみならず、自然界の物までも其の形や色や性質に變化を呈すること少からず、年月の經過は進歩改良を齎らすを常とすれども、必しも左のみはなくて、世の中は退歩の事實を見ることなきに非ず、美はしき制度の廢りて惜まるゝありと思へば、俗惡なる流行に眉を顰めらるゝものあり、世運の循環は或は興り或は廢れて底止する所なし、其の興るや理由の存するものあり、其の廢るや偶然に因るものあり、之を考へ之を評し、故きを溫ねて新しきを知るは識者の任務にして、先覺者の責務なるべし、七五三翠巖君身は醫師にして識見卓越、文學歴史を好み、事物の變遷を研究し古今の興廢を諳んず、

はしがき

有史未曾有の天變地異！彼の大震災大火災！一府四縣にわたる大災禍を極め、約五十萬の家屋と三十萬の人間を一時に潰滅した。空前絶後！悲慘と云はふか、慘膽と云はふか。筆舌に盡し得ざる人類災禍史の最大悲劇である。書店など無論のこと、總ての出版物或は紙型も全部燒きつくした、都は人畜の靈と入り雜りて書物の魂もふらふらしてゐる。然し不思議にも本書生活味の運命は殆んど奇蹟的に淺草觀音と共に原稿はたすかつた。本屋の町田君も印刷屋の大戸君も辛うじてたすかつた。著者も震災の餘波をくらつて裸になつた。それでも不幸中の幸であると云ふ。果して幸だらうか、否。不幸だろうか、否。まてよ。此の際免れて

業餘筆を執つて此の稿を綴る、吾人日常見る所の事物を捉へて詳かに其の沿革を說き、縱橫其の利弊を評す、筆致輕妙にして、讀み來り讀み去りて肩の凝らぬ書物なり、而して其の期する所高遠にして、人心の修養、社會の改良を理想とす、君の如きは想ふに社會を治するの仁術にも通じたる人と謂ふべし、以て序詞となす。

大正甲子春　　東京　森無黃

凡例

一、凡例なんて、今更御ことわりするものは何んにもない。どうせ吹寄的のもので、職業の片手に、讀んだ新聞雜誌や、あらゆる書物を手あたり次第に撮んで、其れを揑ちたものと、爺婆やお喋屋の小言、井戸端會議、風呂屋の板の間に立聞して書いた備忘錄的の短篇ものだと、白狀すれば其れまでさ。泥棒でも何でもない。得て著述と云ふものは斯うしたものである。

左樣、がらくたでございい。自分で讀んで見ても、頗る通俗的で、

生ありしものは徒らに泣叫し嗟歎して居る場合でない。寧ろ落膽も悲觀も無用である。斯くなりし以上は、層一層奮起し、努力し國家將來の爲め活躍し、貢献せなければならない。それが大日本帝國の國民である。そうだ、爲すもの見せるもの皆なそうだ。

本書、元より大自然の大御叱りに先んじて世に警告すべく成りしもの、小蹉跌の爲め立後れたるは遺憾千萬である。よしやらう。見よ如何に世は戒められても其の缺陷は凹凸であり亂雜である。燒跡の始末を片付けなければならない。おう。そうだと緊褌一番、本書は面を洗つて出直したのである。

大正十三年四月

著者識

而も俳諧のやうだ。恰度全卷を通じて、廻り燈籠が、永き夜のそれからそれと移り行く樣である。或る人からみたら狂人の寢言とほか思はれまい。左樣々々、おれは日本人だから、ほんとの事は日本の事ほか知らない道理だ。西洋の事なんか、ちよい〳〵引合に出してはあるが、いゝかげんのものだ。何も見て來たのではない。けどうなんか相手にしなくつても日本だけで澤山なのだ。

物集博士の歌に

くすりしのみちはこゝにもあるものを
外國をのみなどせめぐらん　　高見

一、文章なんか、どうでもよい。讀んで解つたらよからうと思ふ。

客來談二渉世一。戒レ我愼二高輪一。野生踈二修飾一。狂言吐二復呑一。

弘庵大雅

よく云へば樂天主義、わるく言へばづうづうしい人間だ。

一、『生活味』に禿筆を下したのは、大正七八年米騒動で各地に暴動の起つた時からで、翌年一月破天荒の米價大暴騰と其の道連れに騰貴した書物價を睨みながら、昔戀しく思ひつゝ書いたのが初まりで、其時天下の人に訴へて見やうと思つたのが動機であつた。時、頻りに各地の書店に交渉したのであつたが、寒地の庸醫更に

信用なく、乍遺憾荏苒歳月を送りつゝ、だら〳〵記事を補足し來つたのが本書である。されば、今ははや、書中不必要の文句も發見さるゝだらうが、そは御勘辨に預りたい。

大正十三年四月

七五三龜吉識

今昔夜話

生活味

目次

第一編

一、人生……一
光陰矢の如し……一
實踐哲學の手本……二
賴山陽……三
宇宙の大法則……四
隱れたる偉人……六

陸放翁と南洲翁の詩……八
凡人の一生……九
御手植の松……一一
鶴龜の壽命……一三
人間の壽命……一三
大隈侯の百二十五歳……一五
千古不朽の教訓……一六
人世命あり死生天にあり……一八
自然的大往生……一九
死んじまへ……二〇
長生術……二一
不老長命の研究……二三

メチユニコツフの大腸說……二五
腸の蠕働……二六
快川國師の心頭滅却……二七
健康なる腹膜組織……二九
壽命と酒煙草……三〇
若返り法……三四

二、男子

歌に籠る日本魂……三四
武士の階級……三五
在鄕軍人……三六

時代の變遷……三八
眞の日本男子……三九
代表的人物木村重成……三九
女性卓越の大和民族……四一
男性美……四二

三、女子……四四

進んで來た女性……四四
不貞腐女……四五
女尊男卑の外國……四六
嬶天下の標本……四八

シモニーズ婦人觀……五〇
昔の結婚……五一
スパルタの女……五三
女だてらの博奕……五四
裸體のまゝの女……五六
女性の重大なる任務……五八
女子教育の標準……六一
良妻賢母……六二
池田光政の妻……六三
お腹は借り物だ……六六
摩耶夫人……六九
張華の女子戒……七一

如何な家庭にも讀み得る記事……七二

第二編

一、着物……七七
二、下駄……九四
三、米……一〇〇
四、酒……一一五
五、餅……一二八
六、味噌……一三三
七、家……一三七
八、風呂……一四四

第三編

一、鮨……一五三
二、蕎麥……一五九
三、天麩羅……一六四
四、燒芋……一六八
五、髮油……一七一
六、耳垢取……一七六

目次終

今昔夜話

生活味

七五三龜吉著

第一篇

一、人生

光陰矢の如し

『光陰矢の如し、一度去りては復た回らず』。わかりきつた古文句、骨董文句、今でも古稀の村夫子間々若者を前に、禿頭から高い鼻まで、つるりと撫でゝ、今更の金言の様に小言の前提とするのを聞くことがある。

成る程、年の效は龜の甲、夢と去りし光陰、七十の今昔を思ふたならば、斯うも云ひたくなるで有らう。昔、白樂天、鳥窠の道林禪師に問ふ。『如何なるか是れ佛法の大意』

林、曰く、『諸惡莫作、衆善奉行。』

天、更に問ふ、『這箇は是れ三歳の童兒と雖も識得する底』

林、曰く、『識る事は即ち三歳の童兒も知る、行ふ事は七十の老翁も亦難しとせずや。』

天、遂に答ふる無しと。

實踐哲學の手本

實踐哲學の御手本である。村夫子果して如何。僅か十年でも一昔、三年鳴かず飛ばず、或は石の上にも三年と云ふが、實際三年では足りない。人間萬事一昔以上た

たなくては、物にならないのが常である。凡人は幾昔たつても物にならない。唯小成に安んずるのが終生である。

萬葉集に

ますらをは名をし立つべし後の世に
きゝつぐ人の語りつぐがに

山下臣憶良と云ふ人の詠んだ歌である、憶良は嘗ては遣唐使副官となり、時に慷慨熱烈、當世を警醒せしめ、古稀尙ほ鑊鑠として活動をつゞけた人である。

賴山陽

十有三春秋。逝者已如レ水。天地無二始終一。人生有二生死一。安得類二古人一。千載列二青史一。

寛政五年、賴山陽十三歳の時の偶作である。此の詩をみて、博學なる父春水も舌

を卷き、柴野栗山は嘆賞した。小童久太郎、他日天下の山陽たる此時に萠すと謂つべく、誠に偉人であつた。

嘗て、米國の醫者ドクトル、ファールと云ふ人は人間の價を論じて、

勞働者を親とせし嬰兒は、其價五弗、十歳にして五十弗となり、勞働し得る年齡には、八百弗となる。人間の最高價の時は二十歳より初まり、一千二百弗なり。此れが廿八歳迄繼續して漸次下落し、五十歳に至れば六百弗、七十歳に至りて僅に五弗、七十歳以上に至らば無價となるのみならず、金を添へねば買ふ人もない。七十歳以上の老人を殺すの習慣ある土人、存外經濟を知る者である。

宇宙の大法則

人界も亦宇宙の大法則に支配せられた、昔から今日まで、何れだけの人が生れたり死んだりして居るのか數限りないが。世は今昔共に期うした價の手輩が大方で、

千載青史に列した人は、百分比例にしたら甚だ少いものであるだらう、山陽が古人と云ふたのは、歴史に傳はる偉人のことである。

嗚呼村夫子水の如く逝いて

何々何の某儀、豫て病氣の處、療養不相叶、本日午後何時何十分逝去致候間、此段辱知諸君に謹告仕候也追て葬儀は途中葬列を廢し、來る何日午後何時何寺に於て、何式を以て相營み候

と謂つた樣な新聞廣告が出る。病氣で死んだのなら療養が叶はなかつたのに極つて居るし、十日煩つて居ても病氣の處なら、三年寢て居ても病氣の處である、何病で死んだらう、老衰して天壽を全うしたのか年齡ぐらい書いたら宜からう、何時何十分などは通知される人の參考にもならないから、是は省いても好いではないか、扨葬儀がすむと、

何の某葬儀の節は遠路御會葬被成下難有奉謝候此段以紙上御禮申述候敬具

是れで萬事終焉。逸話とか傳記とか云ふものは、一向新聞に出ない。人の噂も七十五日、三年、七年の法事がすむと、御精進も忘れらるゝ世の中、一昔もたつと、そんな村夫子が有つたか無かつたか、誰も知る人は居なくなるのが普通である、昔々其昔、其また昔の爺と婆の御伽噺は寧ろ千歳不朽である。

隱れたる偉人

加賀大聖寺町の郡立病院に佐分利敏雄と云ふ調劑員が居つた。永年倦まず弛まず孜々として勉め、近年愛兒二人までに先だゝれ種々の不幸に不幸を重ねたが、何等の不平もなく、日々の業務に忠實であつた、大正八年九月二十五日午後七時頃のことであつた。調劑室のテーブルの前で、乳鉢と乳棒を手にして調劑して居つた氏は、突如失語症を起し、半身不隨となつた。看護婦が見つけて、醫員に急報し、種々手當を施したが其効なく、翌日の午後六時頃全く絶息した。享年六十三歳であつ

たが、平素痩せた人であつた爲か七十歳位に見えた。記憶力の極强い人で博識であつたことは、氏が書き殘した備忘錄があるが、それを見ても感心することが多い。藥劑師の試驗に應じたらと人が勸めてもそんなものは入らないと云つて、無資格で通した。而も其技倆に至つては當代の學者としても見るべき者があつた。從て傳ふべき逸話が夥多あるが、他日何かの機會に書くことにする。

大酒家で何時も醉つた樣な風の人であつた。祖先は大聖寺藩の家老役其昔佐分利と云つたら、たいしたものであつたと今も口碑に傳はつてゐる。田舍町の病院に一生を送つた氏は、何も世に傳へられず、新聞にも廣告されなかつた。然し僕は確に氏は大偉人であつたと思ふ。之れを思ふと、世には隱れたる偉人が數限りなくあると、隱れたる偉人は居るものである。

陸放翁と南洲翁の詩

死去元知萬事空。但悲不レ見二九州同一。王師北定二中原一日。家祭無レ忘告二乃翁一。

此れは是れ、宋の陸放翁が、示レ兒の詩である。江南に逃げこんだ當時の宋朝は、憐れなものであつた事が、此の名詩と共に今以て傳はつて居る。

相約投レ淵無二後先一。豈圖波上再生緣。回レ頭十有餘年夢。空隔二幽明一哭二墓前一。

西郷南洲が、亡友、月照十七回忌の作であるが、誠に當時志士の心中思ひやらるものがある。月照も南洲も實に青史の人であるから、傳記も逸話も此の詩も世に殘つて居る。昔はと云つても人の口碑に殘つて居るのは、多い樣でも少ないものである。浪花節の文句ではないが、虎は死して皮を殘し、人は死してゞ名を殘す。皮を殘すは虎ばかりではない、猫も死して皮を殘す。人のお尻に敷かるゝより、美人の膝に擁され、珍客にはんべり、やんやと囃さるゝこそ遙かに增しなり。我輩は猫

であると、漱石に見出されて、一編の文字をなせしこそ、雷の屁をかぐ虎の皮よりは遙に優れりとや云はん。博士を虎の皮と心得てるやからは、偉人漱石の眼には馬鹿士と映じたのであらう。今や學位よりか學閥の世の中、學閥は學罰である、あまり學閥を振り廻はすと學閥にあたることになるが。學閥中毒など起すと治療法はない。

凡人の一生

凡人は困つたものである。云はゞ凡人の一生は位置の貴賤貧富を問はず、どう爲ろうが、かう爲ろうが、我利々々主義を通し拔き、自分では解かつた積りでも其の實一さい、解からずやで暮らすものである。自慢を云ふもの、內心反て不安なるは、世上の常習だ。口に忠孝を說くもの反て忠孝ならずとは、善くも喝破したもので世にはそうした人物が大多數である。本多忠勝の辭世に

『死にともな、死にともな、あら死にもとな、御恩を受けし君と思へば』

實に僞らざる忠臣である。君にさゝげし命を病氣で死にたくないと、歌つたものである。

人生五十愧ㇾ無功。花木春過夏已中。滿室蒼蠅掃難ㇾ去。起尋ㇾ禪榻ㇾ臥ㇾ清風。

題して海南行と云ふ。細川頼之が康曆元年閏四月、讒者の長舌に罹り、足利義滿公に忌まれて、讃岐に歸られし時の作である。忠孝の人反て功なきを愧ぢ、讒者厚顏心にもなき忠孝を說く。世の中は廣いもの、惡人あれば善人あり、賢者あれば、愚者あり。貧富と上下、王公と四民、向三軒兩隣、壁屋もあれば大工もある。酒、味噌、醬油、漬物屋、有るとあらゆる職業に、其日を送る人々は、老若男女、强弱生死、冠婚葬祭、喜怒哀樂、人さまざま、有らゆる事を仕盡して、生者必滅會者定離年月變る世の有樣、昔し昔しと無限に古り行くものである。

御手植の松

何々御舊跡に見る衣掛の松、雨晴らしの松、何塚の松、御手植の松も何代目の松が知つた人はない。尤も知る必要もない。死んだ兒の年を算ふるものは馬鹿者の仲間だ。愚にも附かない樣な事を繰り返して、悟り得ぬ人間は、何が出來ても矢張り馬鹿者である。秦の始皇などは其一人だ。徐福をして不老不死の藥を索めしめたが、そんなものが有る筈がない。徐福は此れを幸に、日本に留つて歸らなかつた。馬鹿につける藥はない。昔は斯うした馬鹿が東西數限りなしにある。今後もどれほど馬鹿が出來るか一寸算當がつかない。風來山人が放屁論に、人參呑んで首縊くる痴漢もあれば、河豚汁喰ふて長生きする男もあると云つたのは面白い。考ふれば考ふる程、萬感錯綜す、知らず我輩は馬鹿と悧口とを問はず、故人、古物、古事、古跡、雨風一度に來れ主義で、好も嫌もなく、批判縱横、意のまゝに論じ且つ脫線もして

みたいのである。

鶴龜の壽命

空飛ぶ鳥類は長生だ、池沼に這ふ爬蟲類も長生だ。鶴は千年、龜は萬年の壽命を保つと云つて、萬物の長たる人間界に無暗に有難がられて居る。而して人間も鶴龜の樣に長生をしたいと云ふことを語つて居るのである。然し鶴龜の壽命は古人の非常なる誤算で、人間一生に彼等の最後を認め得ない所から、支那的に云つたものであらう。

生物研究に有名なる「メチユニコツフの著書によると、龜は百五十年乃至二百年位の壽命である。鸚鵡や鷲鳥は八九十歳或は百歳も生き。鷹や鶏は百十八年から百六十二歳の高齢に達するものがあると學者は記載して居る。鷹は死しても穂を摘まず、鶴は幾度となく魚を洗ふて食す。攝生を心得てゐる動物は長生である。それか

ら象は、百年から百四十年間生存して居る。此れも昔の人は、三四百歳も生きるものと信じて居つた。芽出度き正月の御象煮は、今は四角な餅を煮るのだが、昔は象の肉を用ゐたものだとの事である。

人間の壽命

人の壽命はと云ふと、東方朔は何千年生きたと云ふ虚誕無稽な支那の傳説は兎に角として、數代同じ名で續いたにせよ、武内宿禰は三百歳とある。黄帝少昊俱在位百年、帝嚳年百五歳、堯年百十八、舜年百有十、(宛委餘編) 文王租古公壽百二十、王考百歳、大公年百三十六、召公百八十 (六韜晉趙逸二百歳、梁鄱陽忠烈王友僧惠照二百九十歳、金完顔氏醫老二百餘歳 (五雜俎) と記載されて居る。又たアブラハムは百七十五歳、ヤコブは百四十七歳、モセスは百二十歳の壽命を保つたと歴史に傳はつて居る。近代の記錄をみると、ウンガルンのベーテルツオルテと云ふ田舍者は

百八十五歳、グラウスゴウのセイント、ムンゴと云ふ者も百八十五歳、ドラケンベルと云ふ男は百四十六歳、英國のトマース、バルと云ふ農夫は百五十二歳、三河國賓飯郡小泉村の農夫滿平の一家で、滿平は百九十四歳、妻は百七十三歳、子は百五十三歳、孫は百五歳、とある。なほ我國の長壽者で志賀隨翁は天正四年に生れ、享保十五年に死んだ、百八十歳と云ふ説もあるが、百五十五歳は確である。幸庵對話記の主人公たる渡邊幸庵は、百二十八歳、伊勢長命寺の住持禪脩法印は百十九歳で遷化したとある。（東岡舍筆記）。ニコリネ、マルクと云ふ女は百十歳、エルスベエ、ワルソンと云ふ女は百十五歳（メチユニコッフ記載）。前記トーマス、バルの息子は百二十七歳、アンナ、パテックと云ふ寡婦は百二十三歳、（其の夫は百十八歳で死んだ）、グリスタキーと云ふ男は百十歳、其の妻は九十五歳（ケミン記錄）、南米人バリは百四十三歳、其の妻は百十七歳（レヂョンクール記載）、の長生をしたと云ふ。其外百四五歳に達した人は數限りなくある。病理學の泰斗にして一面大政治家

たるウィルヒョーは、大正十年十月十三日が百年の誕辰に相當する。著者の親戚だけでも九十以上百近く生きた人が七八人、百〇九歳まで生きた婆さんが一人居つた。太陽增刊不老長生之研究には、岡村鶴翁の百二十歳、百〇九歳の高見なか、百歳の北村テル、其他八九十歳の人々の經驗談が澤山載つてゐる。大正十年二月二十七日の新愛知で見たのであるが、米國のテイペリー夫人と云ふ人は、百三十歳で頗る健全、而も紐育のウイリアムブルグ銀行に百三十萬圓の貯金を有して居ると云ふ。珍らしい人があると云ふ。而してみると、人間は百歳以上の壽命を享くることは、可能的の事實である。

大隈侯の百二十五歳

大隈侯が百二十五歳まで生きると言つたの無理はないことであるが、それが享年八十五歳で薨去したのは不都合だとも何とも云ふ人はない。特旨を以て叙從一位、

公爵になつたとか、ならないとか云ふことであつた。侯の如き社會、國家に對し、功績もあり、頑健鐵の如き人。昔で云ふとレオ十三世、ウイルヘルム第一世、ビスマルク、ウイルヒョウ等の如き歴史上忘れるべからざる不出世の英才にして、百歳近くに達しても尚且つ偉大なる活動を續け得るものは、只管其の長壽を喜ぶ次第であるが、老耄命長ければ、耻多しの徒は實は無用の長物たるに過ぎんのである。

千古不朽の教訓

ソクラテスが死刑執行を受くる前夜、脱獄遁走をすゝめに來た高第クリートンに誨へた最後の教訓中に、啻に天壽を保全すること、を以て貴しとせず、最高價ある生存をなすことを以て貴しとするとある。洵に人世に對する千古不朽の偉大なる教訓である。近頃所謂人口制限論の如きも、避姙法のみを說かずに幾分此邊にも

及ぶべきものではないか。決して年齡と生命とは一致するものではなく、長壽と腦力とが平行するものでもない。樂天の時事漫畫の通り老政治家が若返り術を受けて枯木に花が咲いたとて政談演說に保安條例を執行せよ、大陰曆を復活すべしなど論じては、如何に昔取つた杵柄でも、元氣橫溢でも、寧ろ邪魔者である。とは云ふものゝ、如何に著者の如き凡人でも、せめて七八十歳位までは生存して見たいものである。

若返り法が出來たから將來は知らんが、實際健全だと云はれた人の死亡するのは多くは七十歳前後であらう。それが醫者の死亡診斷書に老衰と云ふ病名が付いても、事實眞の老衰は甚だ稀なもので、大方は腦、心臟、腎臟等の老人に來易い疾病で死亡するものである。若返り法と疾病とは何等の意味もないことを御承知願いたい。人の死は定命と云つて退ければ其れ迄だが、自然の死と看做す譯のものではないと思ふ。醫療、衞生の如何に由つて、治療豫防することが出來るものである。著者も

現在八十三歳の老人を治療し來つて今尙健全に保たせて居る。人口制限論者中には餘計な事をするものだと云ふ人もあるか知らぬが、云ふ其人も長生をしたいだろう、事實人は誰しも長生をしたいに相違ない。

人世命あり死生天にあり

人世命あり死生天にありなど云ふ言葉は、露骨に云へば悟り得た樣な負け惜みの文句だ。何も、そう云はなくつても、死は死、生は生である。生も自分、死も自分、即ち親の生死は自分の過去、自分の生死は自分の現在、我兒の生死は自分の未來である。感化の及ぼす所、亦同樣である。之を貫くに善を以てするものは極樂に居り、惡を以て貫くものは地獄に落ちたものである。決して夢の世の中だなど云つて通るべき筈のものでないと思ふ。一生は一生、こんがぎり食つて飲んで働くのが當り前。其れがまた自分の爲め國家子孫の爲であると考へる。靈魂不滅を現在から打算して、

死んだ先の事まで現在的に慾ばつて居る奴は、よく〳〵の馬鹿者だ。靈魂は恰も燈火の明滅するが如く、生殖細胞の消長と其運行を共にするものである。我々純粹の日本子が考へると、命あつての物種と云ふのが反てうがつた言葉である。

自然的大往生

貧富や位置などは何うでもよい、命のあらん限り大なり、小なり働きつめて、自然死即ち大往生をとげるのが眞の人間である。御目出度いと思ふ。吾人は、富豪の生活より、貧乏人の生活がすきだ。日中街道を汗水になつて重い車を曳く夫の後から、膝も現はれ襤褸をきた妻が背に乳呑兒を括り着けて、其車を推しつゝ、相互に節面白く掛聲をかけて朝から晩まで働く夫婦。薄暮、鍬を肩にほゝ冠り、田圃道を流行唄をうたふて行く夫の後から、菅笠持つて籠背負ふて、それを聞きつゝ從ふ妻樂しき一日の農事を終りて歸り行く若き夫婦である。何等の蟠りもなく、眞情溢る

るばかり、誠に幸福なる人間の夫婦である。

死んぢまへ

私が住んで居つた、千葉縣の或町に、貧乏な蜆賣の老爺が居て、毎日雨の日も風の日も、「蜆や〳〵」と町から町へと呼んで行くのであつたが、其れが誰の耳にも「死んぢまへ〳〵」と云ふ樣に聞えた、或日のこと警官がそれを聞きこんで、老爺を拘引し、「死んぢまへ」とは何だと訊問すると、「蜆や」と云ふんだが前齒が二三枚ぬけてから美い聲が出ませんと恐る〳〵申上げた。警官も苦笑して、ま少しはつきり呼んであるけ、「死んぢまへ」では面白くもないと云つて放還したと云ふ事がある。所謂、餘計な御世話と云ふのは此の事だ。よし、之れが「しじみや」とはつきり言ひ得た所で、「死時身也」と聞く人があつたとすれば同じ事である。さすがに人民保護の御役人樣であるが、時をり此れに似よつた事があつて困る。其後も老爺不相變「死

んぢまへ—」、一昔たつ事、老爺も今は死んぢまつたろう、

大聖寺町へ時々薪炭を負ふて、直下と云ふ山家から賣りに來る婆さんがある。必ず或る小料理屋に寄つて、鷄肉一斤を刺身につくらせ、携へて居る瓢簞の酒を飲んで歸る。何時も〳〵必ず此の通りである。聞いてみると、婆さん水鼻を拳で拭いて此れをやるから此の年まで達者に働いてゐるのだと云ふ。年はと聞くと、七十五だと云ふ。腰も曲らず、重聽もない。

長生術

人間の長生は、どうしたらできるだろうか。此の問題は、誰しも聞きたいに相違ない。或噺に、神佛を拜むに、

「良い嬶ほしや、金ほしや、死んでも命のある樣に」

と願かけたと云ふ。又似た樣のことではあるが、

「何時も三月常月夜、女房十八おれ二十、死なぬ子三人皆孝行、使つて減らぬ金百兩、死んでも命のある樣に」

と云ふこともある。全く蟲のよい祈願辭である。

まだある、「地震、雷、風に火事、季節、病のない國へ」。然し此れは慾ばつた人間界の希望を、露骨に而も赤裸々に諷示した嘶である。死んでも命のある樣にとは面白いなど云つて、感服する人もあるかも知らんが。幽明處を異にしてまで命あらんと思ふのは迷ひも亦甚しいかなである。

そこを思ふと、佛敎を日本化せしめたる日蓮上人の如きは偉いと思ふ。而して日蓮主義は何時までも日本人の特性でなくてはならないと思ふ。我等も生物である限りは、總て死と共に身神殆ど消滅するものだと確信する、全く命あつての物種であると思ふ。

英國の文學者「ドクトル、ジョンソン」は、死に瀕して、余は地獄に落ちんことを懼ると云つて大聲で泣いたと云ふことである。事實人は生命の長きを陰に陽に競爭してゐるのである。

昔の人が長命の法として、小食、菜食を貴んだことは、日本も西洋も同樣であつた。有名なる貝原益軒先生や、曲直瀨道三翁及び江村惠齋翁の如きは、小食、粗食を奬勵して、過食美食を、戒めた。

不老長命の研究

獨逸のフーヘランドと云ふ醫學博士は、簡易淡白なる食物は攝生と長壽に利あり、複雜贅澤なる食物は、健康を害し生命を短縮する、而して最大長壽の實例は、少年時代より野菜を食して肉の味を知らない人の間に發見すると云つた。近代不老長命の研究に有名なるフーカーと云ふ人は、年齡と共に漸次食物を減ずべき事、其の食物は淡白を旨とすべしと云つた。自分は考へる、フーカーの說を若い時早くか

ら實行して、強て美食を攝るのは好くないとは合點するが、淡白一天張りでも何うかと思ふ。ベイコンは僧侶や隱遁者に於けるが如く小食が長生に最も利益があると云つて居るが、僧侶や隱遁者は適度に隱れたる美食をとつて居ることを知らないのである。

英國の歷史家プルタークスの記載に、古代英國人の食物は、主に草木の實と水とに限られ、其壽命は多くは百三十歳以上であつたと云ふ。支那にも同樣の歷史がある。然し其れが事實であつても現今に於ては決して實行は出來ない。古來長生に就てはまだ〳〵多くの學者が研究に研究をしたもので、或は皮相の觀察をなし、或は統計的に、或は動物の生命を比較研究し、或は生殖上から、或は身體の發育上から、或は種族維持の上から、或は消化器の關係から、或は科學的に研究され觀察され、文獻も亦山の如しであるが、確な所は今以て判明しない。

メチユニコツフの大腸說

然し「メチユニコツフ」の大腸說は、決して机上の空想でなく、大腸は哺乳生活上甚だ必要な一機關たると同時に、哺乳動物の生命を短縮せしむる要素である。大腸は糞便の貯藏所たると共に、腐敗醱酵に因つて成る、化學的物質を吸收し、自家中毒を喚起する事もある。動物研究によれば、細菌が腸壁を通過して淋巴管に入り、血管に入り、肺、脾、肝臟等に達することは爭ふべからざる事實である。反對の學者は、健全無疵の腸壁は、決して細菌の侵入を許さぬと云つて居るか、反て皮相の觀察で、實際上價値なき反對である。著者は「メチユニコツフ」に反對はしないが、ま少し附け加へて見たい。吾人は傳染性に對する腹膜の防禦作用と、細菌の分離作用を有する腸の蠕動とを忘れてはならない。

腸の蠕動

自分は、外科醫であるが、開腹術を行ふに當つて、常に腹膜腸間膜の保護と、手術後の魔醉藥を禁ずべきことを注意するのである。昔は、手術するときに魔醉なく、助手は突然、患者をしたゝかに擲る、患者はそれに氣を取られるゝ、此機を外づさず術者は最も神速に切開したものだと云ふことを聞いて居るが、魔醉なしに手術し得る者なれば、それこそ理想的に最も進歩した方法で、腸や腹膜の作用を縱しや一時的にも減削せしむることなく、而も全く安全であると思ふ。擲るとか驚かすとかして意志の轉換を行へば、之に由て觀念は疼痛を忘れ得ることは事實である。

快川國師の心頭滅却

甲斐の國慧林寺の快川國師は、織田信長の爲めに門下と共に「心頭を滅却すれば

火も亦涼し」と云つて、烈々たる猛火の中に平然として燒死したと傳へ、又た大德寺管長たりし宗般禪師は、靜岡で疔を患つたとき、坐禪のまゝ魔醉もなく切開を受け、而して、手術されたのを知らなんだかの樣であつたと云ふ。或る山伏は、自由に局所の觀念を忘れ得たもので、齒を拔いても、切られても、疼痛なく巧に心を他に縮め得たとのことがある。關羽は圍碁しつゝ手術を受けた、然し此れらの事實は、人によりて行り得るもので、一般の人間には駄目だ。やはり普通人の手術は、魔醉をかけなくては出來ない、爲に我々醫師はよくない事と知りつゝも、魔醉をつかつて居るのである。

健康なる腹膜組織

元來健康なる腹膜組織は、細菌に對して抵抗力强く、急速に殺菌し吸收するものであつて、腸の蠕動は細菌を分離して、腹膜組織の廣汎面に觸れしめて、腹膜殺菌

作用を補助するのである。それが魔酔をやると此れ等の働きを著しく減退すると共に、傳染に對する生物の第一自然的抵抗者たる。白血球が甚しく減少さるゝのである。

總て生物の壽命は、此所らから考ふると、確かな平均數は元より不明であるが、大凡そどの位の生命だ位のことは解かる筈である。動物に就て考ふるに、先づ羊は運動甚だ不活潑な動物である。從て食物を取つてから糞便の排泄せらるゝまでに、一週間の時日を要すると云ふ便秘のしかたである。大便は腐敗醗酵するに、腸の蠕動が不充分だとすれば、腹膜の殺菌作用は薄弱な理である。此の羊は、八歳乃至十歳頃より齒牙脱落を來たし、老衰の徴を呈し、十二歳位で死亡する。長生した所が十四歳位のものである。それだから、羊類は、毎日小屋から出して追ひ廻さないと早く死ぬ。モルモットも、白鼠も同樣に不活潑な奴で、六、七歳の短命である。而して大腸のない動物は、喰ふ、排す、飛ぶ、這ふ、跳るから、割合に長生である

が、大腸ある哺乳動物は運動の不活潑なるだけ、それだけ短命であることは、理の當然、爭ふべからざる者である。人間もそうだ、飲食物などには餘り關係はない。貧乏で兒だくさんでも、長生の出來ない事はない。

壽命と酒煙草

「ケミン」の記錄をみても、壽命と酒、煙草、粗食などは關係のないことを證明することが出來る。なんでも人は、忠實に働かなくては長命は出來ない。長命の藥は外でもない、腹膜の代りに腸を殺菌し、一方榮養素を補充するだけのことで、是非攝生法として運動をも命じなくてはならない。

昔或人の妻にて評判の懶けものがあつたが、壯年時は病氣と云ふ程のこともなく、怠惰を本能として居つた。然るに年齡と共に漸次衰弱して、はや三十過は歩行さへも碌々出來なくなつた。そこで、某の醫者に診察を受けると、其醫者元より評判の

懶け婆さんと知つて居るから、診斷は何んであつたか知らんが、斯う云つた。

『愚老は最良の藥をやるが、お前の病は藥ばかりでは治らない、原因は鎭守樣の罰だ、だから、毎日早起して鎭守樣へ日參詣をしたらば治る』。醫師の藥は唯の砂糖水而して、懶者の家から鎭守迄は二丁餘りもある。翌日から懶者はかゝさず日參した、病氣は日に日によくなつて全治したとの事がある。此の醫者は實に偉い、其態度は吾人の大に學ぶべきものである。長生の秘訣も亦た此の規則正しき足の運動にある。

若返り法

近頃大流行の若返り法は佛國の生理學者で、ヴォロノフと云ふ人の主張し初めたもので、老齡の牡羊や山羊に、組織腺を接種すれば元氣恢復して若々しくなる。人間も同樣な接種をすれば、老人を若返らせ壽命を延ばすことが出來るだらうと云ふ。尤も、內分泌の缺如せる所を補ふて元氣の恢復を計り、以て老衰を防ぐと云ふ

ことは、久しく學者から推想されて居る事である。

のみならず、內分泌の恢復ができるとすれば、老人性萎縮を防ぎ得ると共に、一方老人性惡性腫瘍（特に癌）發生の內因を除き、或は後天性に生ずると思はるゝ素因をも、豫防し得るものだろうと思はるゝ。現今盛に行はれてゐるのは、スタイナッハによりて發表せられたのが初まりで、精絲に簡單なる手術を施こし、內分泌も高め生殖力も保存すると云ふ慾ばつた方法である。然し著者の考では、科學的、人工的、故意的、等あらゆる方法を施してまで、人間の生命を長くする必要はなからう。

要するに、人間は精神が生命である。老耄、老朽、耄碌と云ふぼけた精神になつたら、若返つた所が、人形も同然、實は生きて居る甲斐はないのである。と云つて若返つたからとて孫に入籍することも出來ず、昔物語のやうに棄やり場に困ることが出來はせまいかと思ふ。だから人間は、精神の强壯な間に、折角働いて置かなけ

ればならないと思ふ。それが又長命の秘法である。仙人は長壽だと云つて皆仙人になつては此の世が立たない。安りに若返へられても困る。

世の中は今日ばかりこそ悲しけれ
昨日は過きつ明日は知られず

（太閤秀吉）

さすがの太閤も、老人になつては人生を悲觀したものである。人間は若返へつたからとて何千年も生きて居らるゝものでなく、又病氣と云ふものもある。唯大悟するのが大安心だ。何も悲まなくても宜いではないか。寛仁大度從容として生き、生きてる間は國家の爲め日本民族の爲め、樂觀的に折角働けばよいではないかと思ふ。得て、日本の老人は、悲觀的になり、後生願になり易く、自身から老衰をはやめるの傾がある。佛敎渡來前は、そうでも無かつただらうと思ふ。

そして見ると若返つても貰ひたいが、ぬけた齒がはえたり、皺が延びたり、白髮が黑くなつたり、氣が若くなつたり、することは望まない。寧ろ幼少より修得し鍛

錬し來つた堅實なる精神を保持して、最後まで奮鬪せられんことを希望するのである。

不老長生の藥に失敗した秦の始皇を初め、ヴアン、ヘルモットの不成功、近くはメンチコツフの學說やら、スタイナツハの若返り法等續出して、我國等では若返り法の論爭までであつたが、畢竟秦の始皇がお手本であつて、生物は必ず死するもの、不老も不死も絕對に不可能であると心得れば誤りはないのである。

今日流行の若返り法と云ふのは不老不死ではなく、或程度まで活動力を回復せしめ得ると云ふ意味である。然して、餘り慾ばらずに短命な動物を見るがよい。昔から蜉蝣は最短命の標本になつてゐるが、幼蟲時代からは數ヶ月の生活である。世には、もつと短命なものがゐる。水中に生活する輪蟲の類は、僅に三日間の命である。そして見ると、人間は產れるなり死んでも壽命は卵より始まるとすれば、十ヶ月の壽命を保つたのであるから、輪蟲や蜉蝣などよりは長命であると云ふ事が出來る。

二、男子

歌に籠る日本魂

海ゆかば、水づく屍、山往かば、草むすかばね、天皇の、邊にこそ死なめ、顧みばせじと言たて、丈夫の、きよき其名を、古よ、今のをつゝに、ながさへる、祖の兒どもぞ。

此れは、大伴家持が謳ふた歌である。聖德太子憲法の中にも。

國に二君あらず、民に兩主なし、卒土の兆民王を以て主となし、任ずる所の官司皆是れ王の臣なり。

如何に時代の影響あるも、天孫の苗裔たる日本民族は、「天に二日なく土に兩主なし」と藤原實資が云つた如く、宗家の無窮なるを思ひ、忠孝一致、祖先を崇敬するの信念を固くし、滿身唯是れ忠誠の士たることを忘れてはならない。此れを是れ

日本男子と云ふのである。

山はさけ海は淺せなん世なりとも
君にふたこゝろわれあらめやも　　源實賴

此の歌を外國人にきかしても意味は解るまい。日本人でこそ初めてわかるのである。英傑ナポレオンの希望も此處にあつたのであるが、國體と人心が同化しない、終にセントヘレナに配所の月を觀るに至つた。獨逸皇帝も同じ夢を見たのであつたが、歐洲大戰に於て全く破れた。我日本帝國は、如何にバタ化しても、腐敗しても、我國建國以來悠久三千年、皇統連綿として東洋の一極に屹立し、此の麗はしき國體を奉戴せる大和民族の心の底には、深く深く刻み込まれてゐる大和魂があるから、此の歌の意味は直に了解ができるのである。

武士の階級

武士てふ階級は、王朝の末頃から出來たもので、上古はやはり國民皆兵、士民の別はなかつた。事なければ家にゐて業務に從事し、一朝有事に際しては兵器をとつて軍務に服したものである。而して家に在つて親に孝行なるが如く、外に在つては君に忠義を盡し、其間何等の蟠りもなかたつのである。何と云ふ、さつぱりとした美しい風だろう。此れが我々の先祖だと思ふと胸がさつぱりする。

在鄕軍人

今の帝國在鄕軍人會員が、恰度上古の國民と同じことである。だから今後も國家の中堅となるべきものは、政治家でもなく、資産家でもなく、宗教家でもなく、學者でもなく、商人でもなく。勞働者でもなく、實に一點の邪氣なき帝國在鄕軍人會員である。國民思想も民力涵養も社會改良も亦た此の在鄕軍人によりて指導せられてこそ、我邦建國以來の精華を發揚し得るものと思ふ。誠に在鄕軍人の國家に對す

る責任は、益々重且つ大を加ふるのみである。そを軍人たるべきものが、無考にも妄りに時代的の惡化に其思想を左右せらるゝが如きことがあつては、それこそ一大事である。過年內務大臣の訓令として出た五大要綱並に實施要目などは、軍人たるものは皆心得てゐる筈である。自分はこう思ふ、在鄕軍人たるものは、日常の業務と軍人と云ふことを別々に考へて、而して何處かに其一致點を見出す樣にしたならば、自然忠孝一致上古の風になり得ると共に決して新思想に眩惑することなく、反て周圍を善化し得るだらうと思ふ。昔、應神の御代より、儒教によつて易世革命思想が傳はつたが、武士てふ臣下に限られて眞の大和魂は曇らなかつた。其後二百年、欽明天皇の朝より、佛教によつて厭世的思想が普及されたが、武士道は反てなさけを知るに至つた。而して儒教も佛教も漸次日本のものと化し終せたのは實に痛快である。又た、天文年間になつて西洋思想即ち基督教が傳來した。豐臣、德川の時代は之を禁じたのであつた。

時代の變遷

時代の變遷は妙なもので、明治維新の後は此れも信仰の自由を許された。此の宗教は個人主義、社會主義で、我國風に合はない所が甚だ多かつたが、我國民の同化力は其の短長を調節し、反て彼れを感化せしめんと勉めつゝあると思ふ。然るに最近に至つて、宗教でない實に恐るべき新惡思想が渡來した。それは種々の名稱はあるが、要するに破壞思想である。露帝國は此れによりて亡びたのである、前車の覆轍となつたのである。嗚呼露國帝室の最後と露國民の慘憺たる現狀を思ふ毎に戰慄する、日本國民よ、決して此の恐るべき惡思想に迷ふなかれ、誤信するなかれ。我等は、どこまでも日本男子なるぞ。思想動くの時高らかに家持が歌をうたへ。實朝が歌をうたへ。維新前後に於ける志士仁人を顧みよ。而して感奮興起せよ。祖國を愛する。日本男子よ。

眞の日本男子

一般に云ふと、男子と云ふものは、總て理智的で、決して細事に頓着しない、且つ意志剛健にして、深慮に富み、理を視ること明にして、確信あり、而して斷行的である。其冷靜なるは、長く生存競爭場裡に立ちて角逐せんが爲めである。其體格の如きも、胸廣く、腰脚共にすらりとして、丈高く、强健、敏捷にして、如何にも活動的容貌である。眞に男らしい男子の體格は、見るからに氣持の好いものである。堂々たる此の體軀に、大和魂を入れたのが、眞の日本男子である。

代表的人物木村重成

彼の木村長門守重成の如きは、全く此の通りの男子であつたに相違ないと思ふ。芝居に出る武士などは、ほんの鰹節で、唯だ形のみを美しく見せる河原乞食である。

統計に見る今の青年男子が、年々に身心の健康を害しつゝあるを見ると、行く末、或は鰹節になりはせんかと老婆心に心配さるゝのである。現に壯丁の身長も短くなつて來る樣である。學生の精神も俳優の樣になつて來た。實に斯うなつてくると、今の所、民力涵養も那邊から手を着けてよいか夢の樣である識者も恐らく五里霧中であるだらう。嗚呼、若しも一朝事あるの時、吉田松陰が嘆せし如く、百萬の城中男兒なく、ふけば飛ぶ鰹節の連中のみなりせば、我國家を如何せんや。誠に杞憂に堪へぬ次第である。吾人は人口の增加するばかりを喜ばない。軍隊の增設、兵器の改良、新兵器は必要に相違ないが、寧ろ大和魂で張りされる樣な而して强健な男子の多きを希望する。所謂一騎當千の勇者が一人でも多いのを希ふのである。それは戰爭の時ばかりを云ふのではなく、平素百般の事業にあたりても一騎當千であることを意味する。例えば勞働にしても、一日僅か八時間では、一騎當一である。人間は一晝夜に三、四時間もねむれば足りるものである。されば居眠りしてでも體力の

許す限り、しつかり働くのが所謂一騎當千である。而して上下相愛し相親しみ何等の不平もなくあつたならば、勞働問題なんどは、大和民族には實は必要のないことである。何も、赤雫奴の眞似をしなくともいゝではないか。嘗て八幡製鐵所の暴動や、東京電車の怠業などを日本に見たのは誠に遺憾である。實は現今の樣な日本人の體格で八時間制は歐人に比して製產力を半減するものである。

女性卓越の大和民族

大阪毎日新聞で伊賀駒吉郎君の、『女性卓越の大和民族』と云ふのを讀んだことがあるが、御說の通り天照大神、氣長足姫皇后は如何にも卓越せる女神であることは、我々大和民族の祖先として日々崇拜する神々である。然し源氏物語や、心中天の網島などを例に引いて、大和男子は女性的色彩が多いなどゝ云ふのは、ちと考へものだ。なるほど淸、紫兩女の如きは匹儔すべきものなく、又た近松の傑作も感嘆すべ

きものではあるが、それは文學上の大作として賞すべきもので、作中の人物を以て直に當代の人性を一般に描寫し得たるものとすることは承知が出來ない。平安時代も、德川時代も、其れら傑作の出たときは、所謂文弱時代で、人性は虚榮、虚飾、奢侈、贅澤に囚はれてゐたのである。

男性美

思ふに男女兩性が互に其美しいのを慕ふた結果、自然の美は勿論、藝術の美をも渇仰するに至り、此處に文學は發達し、美術は進歩するに至つたものである。男子若し容貌風采の美を似て女子を征服し得るならば、其の女子は淺薄輕跳のものである。女子若し其容貌虚飾を以て男子を征服し得るならば、遊蕩好色の男であるとは、誰かゞ云つた洵や美人は反て世を毒し、人を誤るもの、大にしては古來傾城傾國の難ありと云つたのは事實である。

近頃美顔術とか美容術とか云つて、それを研究してゐる者もあるが、馬鹿げた事である、源氏の君や、治兵衛なんど云ふものは、まこと其人物があつたとすれば大の馬鹿者、大和男子の風上にも置けぬ奴である。中世以前より戰國時代の武士、維新前後の志士を見よ、當時女傑も多かつたが、其活動ぶりは、大和女子として大和男子を補助した美しい歴史で、之が爲め男性美を偉大に發揮せしめたものである。群雄、志士の歴史や、傳記を讀んで見玉へ、血湧き肉躍るの感があるではないか。靜と義經虎と曾我などは、男女共人間美の極致であり、眞に我國史の光彩であると思ふ。歴史は繰り返さるゝもので、現代ははや源氏の君や治兵衛が歡迎さるゝ世の中となり果て、男女共に體質も精神もよた〳〵になつて了つた。嗚呼、何と云ふ情ない世の有樣だらうか。此分では近頃よく見る天正の維新とでも云ふ樣な事がなければ大和民族の位置はあぶない。志士は居ないだらうか、勤王家はゐないだらうか。

三、女子

進んで來た女性

昔から男女と云つて、女は萬事萬端男の下に位置して働いて來たのは事實で、我國では二千五百年以上此の狀態を保つて來たのである。女ならでは夜のあけぬ國でも、女尊男卑など云ふ意味はなく、互に其天職を守つて隔意なく活動し、此の男女の別は整然として一絲亂れなかつた者である。然るに明治以來歐洲風が加味せられてから、いやに變調子となり、婦人問題に關する議論は漸次やかましくなつて、近頃は女の飛びあがりものが夥しく出來て、少からず帝國の精華を毀損しつゝあるは事實である。時々獨立せる女など云ふ文句をみるが面白くない。又た男女同權論だとか、婦人參政權だとか、或は學者としての婦人、哲學者としての婦人、立法者としての婦人、醫者としての婦人など唱へて、彼これ男女入り亂れて議論する世の中となつた。歐米諸國は

さすが自由國だけあつて、前世紀の半頃から婦人は權利と作業を擴大して男の頭を尻に敷かうとしてゐる。而も尙婦人は疑問のもの、研究物だとしてゐるのが面白い。

不貞腐女

世には不貞腐の女と云ふのがある。優しくすればするほど附けあがり、遂に常識を失して無鐵砲の振舞をなし、さては主人も親も亭主も隣人も何も彼もあつたものでない。謂はゞ、手のつけられない痴者がある。優し味一方で行くと、何處までつけあがるか解らない。此樣な女には寛大の態度も或る程度に留め、時に嚴然たる處置に出で常に積極的態度を以て遇せないと、徒に增長させて、所謂お轉婆的自我心を激成せしむるのみである。僕の故郷に其の昔、此樣な女があつて、幾度嫁に行つても必ず破鏡となつて生家に歸つた。親も兄弟もほと〳〵持てあまして、談合の結果、村の若衆連中に懲戒して貰ひたいと依賴した。其當時村々には、大若衆、中若衆、

小若衆と云ふのがあつて、今の青年團よりも、もつと團結力が強く、村内の何事にも立觸りて解決し、强者を凌ぎ弱者を助け、以て鄕黨の美風を成したものである。されば若衆の勢力は非常なもので、時と塲合によつては藏を破り、家をも潰し、邪惡の徒は村外に放逐したこともある。この勢であるから溜つたものでない、依賴を受けた娘を何の苦もなく引きずり來つて丸裸體となし、腰卷だも着けさせず、後方から笛、太鼓を以て囃したて、村中を引き廻し、而して今後を戒めて、親に返した。何條厚顏のお轉婆な女でも、此れには懲り〳〵したと見えて、其後良妻賢母になつたと云ふことである。

女尊男卑の外國

女尊男卑の西洋では、此樣な事は夢にも無いことである。而して西洋の事實を擧げて見ると、日本人には一寸合點行かない、珍無類の事がたくさんある。

波斯のペッハウーラと云ふ人は御國柄に反し、絕對の男女同權論者で、婦人と男子とは全く同等の能力あるものであるから、總て同樣に見做すべきものだと云つた。女醫問題に就ては、西曆千六百七十二年の二月二十九日、ボロニヤ大學に於てラオンペッシーと云ふ三十二歲の婦人が、長時間の演說をしたのが始まりで、獨逸の代議士ペウンペッハなど云ふ人は、議會に女醫案を提出して婦人說を高めた。彼れは自分の男性を忘れて、妻君は亭主よりも敏捷で、亭主は盲判を押すものだ、婦人は男子よりも風儀嚴格である、女子の薄弱を論ずる人が、妻君に面して吐露したならば、其反抗に會ふて縮み上るだらうと云つた。伊太利人のマンテ、ガッツアーと云ふ人は、婦人は同情に富み、細心にして優美であるから、實地醫師に適する特別の才能があると云つた。女尊男卑の國では此樣な說を聞いても敢て不思議とも思はず、寧ろ名論であると、多大の贊成を得て女界に大もてに持てるだらうが、日本などでは、馬鹿者、お心よし、鼻たらしとのほか人は云ふまい。昨今は知らないが、我國の昔な

らば此樣な男らしくないものとは、結婚する女もなかつたらうと思ふ。日本の嬶天下と云つてもざつと次の樣なものである。

嬶天下の標本

眞面目で働きのある妻なら家事の一切を任せた方が、外に活動する其の夫のため却つて安定である、此の意味に於て今回の軍縮難に膺つて、劈頭勇退して後進者の途を拓いた侍從武官長内山大將の如きは、訓子夫人に對して「日本一嬶天下」の尊稱を奉るまでに、家庭の一切合切を夫人に任せきりであるだけ夫だけ、夫人も亦大なる責任をもつて、家事經濟は云ふまでもなく、家庭敎育の總てを單りで切り廻してゐられるところに、嬶天下の强い光りがある。

「聯隊長の奥樣だからと云つて金紗の召物を着けますと、他の佐官の夫人も之れに見倣はれます、上に立つものに此の點が第一だと思ひます、强いて軍人を例に引

はありません、會社や銀行に關係あるお方でもさうです、さほど多くもない收入の方が綺麗に着飾つて物見遊山におでかけなのを見受けますが、御自分の身分と子供の敎育とを顧みると、決してそんな浮いたことはできないはづです、永い間の家庭に於ける感化と習慣とは、其のまゝ子女の品性習癖となり易いものですから、最も注意せねばなりません、一例を申すと、姿勢を善くするせぬも亦た保護者の責任で、私共では夜床に就く前に必ず五分間體操を小供全部にやらせ、また一人の娘に早くから琴を習はせたところ、いつの間にか脊が前に屈んで來ましたから、之はと思つて斷然琴の稽古をやめさしたところ、肺癆が段々治つてまゐりましたやうな次第で、なんでも親の心一つで奈何にでもなるだらうと思はれますが、扨て世の中は自分の勝手には參らぬものでありまして云々」

夫人は慇懃に語られたが、長男の英一郎氏は夭折し雄二郎豪三郎氏武四郎氏外すべて男女九人の母として、乃至かくれたる模範的の賢夫人として、一部の婦人間に

其の德をたゝへぬものはない。

シモニーズ婦人說

西曆紀元前七百年、希臘の詩人で、シモニーズと云ふ人の有名なる婦人說がある其概要は、造物主の目的及び約束は、男子には人間の魂を入れ、最高等の性質を有せしめて、最上等の位置を與へ、女子には動物の魂を入れ、悉く動物的性質を有せしめて、最下等の位置を與へたもので、外形も魂も男子と異なり、豚の如く、狐狸の如く、蛇の如く、猫の如く、馬の如きものがあると云ふ。爾來二千五百年以上、今日に於ても、此の說の痕跡を止めてゐる。古の婦人說は、重に精神上男子との比較をしたものでシモニーズに至つて始めて起つた問題である。紀元前七百年以前に遡つてみるに、何地の歷史も、其最初は、神秘的男女の神を以て起つてゐる。而してそれらの神は相互に補助し合ふて權力爭ひもなく、比較上の議論もなく、和氣藹々たる樣がうかゞ

はれる。然るに、人類の繁榮、社會の進步と共に、小は夫婦喧嘩から初まり、さては相互の權力爭は漸次膨大し來り、今や社會問題をまで惹起するに至つた。書經の牧誓に、牝鷄司晨と云つて、妻が夫を凌いで權力をふり廻はすことを諷してあるが、抑々是れらも婦人說の始まりではないかと思はれる。斯くて全世界の婦人が晨司てふことになり、詩人シモニーズに至つては、最も露骨に婦人攻擊を世上に發表したものである。

昔の結婚

結婚法を見ても、大方推知することができる。其の最初は共同婚と云つて、女子は男子の共有物であつた。それが人間相互の競爭が初まると共に、强勇を尊び、男子は他の部落に侵入して女子を掠奪して來るのを名譽とした。此れを掠奪婚と云ふのである。次で起つたのが、賣買婚と云つて、男子は女子を賣買したものである。

金品を結納として取りかはし、結婚を約束するのは、賣買婚から轉じたもので、今も尙ほ我國に行はれてゐる贈與婚である。共諾婚と云ふのは、最も進歩した結婚で專ら牝鷄司晨流の西洋諸國に於て行はれてゐる。今や我國に於ても、共諾婚、さては自由結婚など云ふものが流行り出し、古來敎化し美化し來りたる、最善の結婚法も、歐化されんとしつゝあるのである。武士道の盛であつた封建時代の結婚は、嫁に行く娘にとつては寧ろ最大なる悲みであつた。生家を去るに臨んで、懷劍を懷ろにして婚家に入つたもので、貞婦二夫に見えず、死しても生家に歸らずと云ふ決意を示したものである。今の世は反對で、結婚は樂みと心得、遊女が情客の所へでも行く樣なものである。再婚又た再婚、一向、耻とも何とも思はない。而してみると、現代の女に流行する濃艶なるあの化粧が、悉く劣情挑發的のものとほか思はれない。ほんとの無垢の娘はゐないかと思ふとつく〴〵嫌になる。古い希臘の時代には、スパルタの男女は、裸體のまゝで平氣で運動をしたものだそうで、而も彼れら

の間に不行跡は決してなかつたと云ふ。聖人プラトーンさへ、裸體の男女が共に相混じて、體育を勵んだり、或は舞踏をして樂しんだりするのは、此の上なき善良の習慣だと賞讃したのをみても、此の時代は裸體を賤む現代よりも、寧ろ善良なる風習であつたことがわかる。

スパルタの女

彼れらスパルタの女は裸一貫白粉も塗らず、綺羅も飾らず、臙脂を差さゞりしならんも、天然の麗質を存する、眞すぐな女らしい女であつたらしく、化粧や衣服で唯是れ男の眼を眩惑せんとする、營養不良な青瓢箪の樣な血色の惡い脆弱な女ではなかつたらう。日本では、女の白い脛を見て通力を失つたのは、久米の仙人ばかり耶蘇敎國でない御蔭で、バタ黨を除いては、女の脛位昔から何とも思はない。從つて婦女に對する犯罪は比較的少なかつたものである。

女だてらの博奕

大正十一年八月十日新愛知にこうした記事があつた、

本年一月から七月末日までに、愛知縣下各警察署に檢擧され、名古屋檢事局の記錄に登つた犯人は約三千人である、男は女よりも世帶經濟其他に於て苦勞が多く責任も重いから、貧窮の結果罪を犯す人が多く、總ての犯人の九分九厘は男であるが何よりの證據である、女犯人として檢擧され、普通裁判を受けたは十一名、略式裁判は三十六名ある。

略式で處刑されて居るは總て賭博である、女だてらに博奕など打つは一體どう云ふ連中かと云ふに、其多くは後家、妾、酌婦などである、檢擧された事件の中には、晝間の退屈凌ぎに、妾が近所の後家さんを召集して八々勝負の眞最中、巡査に踏み込まれて居るのがある。

普通裁判で科刑されて居るは詐欺二件、住居侵入一件、他は全部萬引である、萬引犯人で一番年の若いは長井スノとて、都會の風に憧憬れて、娘心の淺墓から呉服屋の店頭で反物一反を掠めた田舍出の女である、年上は大神ゲンと云ふ婆さんで、婆さんの犯罪動機は家庭の苦しさに基いて居るらしい、其他は二十歳から三十八歳までの女ばかりであるが、酌婦其他のつまらない女ばかりで、相當家庭の奥樣やお嬢樣は見受けない、犯罪は何れも單純なものばかりで從つて、動機も單純なものばかりである、御器所町土釜アサの住居侵入は、電車々掌であつた元の亭主が復縁を肯き入れぬを立腹し、猫いらずを飲ませて殺さうとした事件である、其他の事件は、亭主と共謀して酌婦に住み込む約束の下に相手方を騙したり、小間物屋の店頭で櫛や簪を萬引した小さい犯罪ばかりであるが、斯うした犯罪の被告人には美人も餘り見受けないが、證人には時々美人の出廷を見る、八日も區裁判所へ出廷した水色地に波模樣のモスの浴衣に牡丹模樣の華美な夏帶を締め、當

世流に頭髪を梳き分けた廿二三のポッテリ肥った色白の美人がそれであつた。訊問事項が簡單で、事件の内容は窺はれなかつたが、北海道の商業女學校を卒業後、家庭の事情から酌婦に成り下り、流れ〳〵て今は海部郡津島町のある料理屋に酌婦奉公中の女と云ふことのみ判つた、どうせ淪落の徑路を辿つた女であらう。

裸體のまゝの女

吾人は先づ、裸體のまゝの女を、科學上から研究して見るの必要がある。綺羅白粉の化物では男女の比較は出來ない。先づ男女を比較して直に吾人の眼につくのは、胸腰の釣合と、身長の差異である。

嘗て獨逸のショペンハウエルが、女性の外觀を評して、「發育の程度低く、臂廣く脚短き人間」と云つたが、實際此の通りであることは誰も反對はできまい。事實女の身長の短いことは、我々が日常目擊するばかりでなく、幾多の統計によつても證明

せられてゐる。既に幼生兒の時から、女子の身長は短いものである。

原始時代の野蠻人でも、女の身長は短かゝつたと云ふ。而してみると、女の身長が男子よりも短いことは、昔も今も同樣である。然しながら、西曆千八百五十五年リールと云ふ人の著書によると、三百年以前に描かれた處女の容貌は、男性的容貌に近く、中世紀の畫工の手に成る天使聖女の像も男性的の輪廓を帶びて居ると云ふことである。此れに依つて見れば、古代の男女は容貌體質上の差別が著しく無くつて、唯だ身長と生理的差異、特に生殖器の差に於て區別が出きたものと推定し得るのである。

其れが文明の進むに從つて、生理的差異は勿論、容貌體質上の差異が、次第に其範圍と程度を增して來たのであらう。是れは、原始時代から差異のあつた生理作用が基礎となつて、世の文明につれて、自然分業のよつて起つた結果であると思ふ。然し此れは理論で、あまりあてにはならない。

女性の重大なる任務

元來、造物主が女性に授與したる重大なる任務は、姙娠、分娩、育兒であつて、女性の價値から離すべからざる天職である。されば、女性が男子と伍して、生存競爭場裡に角逐しやうとするが如きは、天賦の性に咫る根本的誤りであると思ふ。纖弱優美なる女性が、よし獨身生活をなすにせよ、直接に間接に影響ある天賦の性能上、社會が進武すれば進歩する程、分業の範圍を廣め、體質の差を顯著ならしめ、到底男子の領分内に侵入し得ざるに至ることは、理の當然であつて、否認することはできない。

女子の生殖腺たる卵巣が、成熟して卵子を排出する年齢になると、乳房は大きくなり、骨盤は廣く發育し、皮下脂肪は增加して艶々しくなり、所謂豐賦艶麗鬼も十八と云つた樣に、どんな無細工の女でも、何となく女らしい美しい容姿となる。此

れがまた異性の注意と惹くに强大な力を爲すのである。即ち女子の身體は斯くの如くして、自然、生殖機能に支配せられてゐることは明白な事實で、日常の生活が又た其れに一致するのである。

エリス、ブロッホと云ふ學者は、女性を小兒に近きものと認めてゐるが、事實脂肪に富んだ艶々したる皮膚美妙なる音聲等、何となく小兒に似よりたるのみか、疾病さへも小兒の疾病には、女性も罹るものである。だから、絶對にエリスの說に反對することも出來ない。兎に角著しく男子と異なり、女性に必發するものは、生殖腺の發達と共に月經が起ることがある。此の來潮に伴ふて、所謂女性生活上に於ける波動が進退する事になる。即ち月經潮來と共に、女性の生活現象は著しい變動を起すものである。此の女性に强大なる勢力を有する生殖腺の影響は、或は性行を急轉し、或は恐るべき犯罪を構成することは、學者の著書と事實が證明してゐる。

姙娠、分娩、哺乳等、大なる生理的任務は、女性身體の發育を古來抑制し、遺傳

し來たのでも有らうが、男子に比して平均體重の少いばかりでなく、內臟の總てが輕く、赤血球の數も少く、新陳代謝機能も弱く、從て筋肉の發育、活動力も弱い。之れに反して、男子に比して多いのは、脂肪と水分である。大人にして肥滿軟弱なる體質は、女性特有のものであると云つた人もある。

其他、微細に觀察すれば、皮膚、毛髮、耳鼻咽喉、眼から齒や爪に至るまで、男子とは異なつた所がある。一見纖弱で、よく云へば優美である。

然るに、近頃女傑とか何々女史とか云つて男らしい女が、西洋にも日本にも多くなつて來て、其體格さへも男子らしいのがある。昔、男まさりと云つた樣なものとは、到底比較にならない。もつと〳〵甚しいもので、社會の進歩に反對逆行する、大不具者とも認むべきものが、年々增加する傾向がある。此の如きものが、果して時代の要求する女子と云ふものであらうか。

女子教育の標準

女子教育に就ては、世界の教育家が、頭腦を惱ましてゐる重大なる問題である。或は、獨立自營、高尙なる修養、權利思想の養成など云つて、漠然新時代に於ける女子教育の標準として力說すべしなど考ふる者もあるが、其は現代を皮相に觀た直覺的の考で、深慮に富む理智的思想から出たものとは思はれない。一體、女子と云ふものは、社會人類の生存上にも、亦た其風敎上にも、多大なる任務を有するもので、而も彼れらが賦與されたる性能は、情的にして細事に注意深く、直覺力に富み調停、慰撫に巧みである。而して、上述の如き體格と天職とを有するを見れば、女子教育の標準は、いつの時代となつても良妻賢母を作ると云ふ事は、動かすべからざる者だらうと思ふ。

良妻賢母

然しお斷りして置くのは良妻も、賢母も場合によつては良人の代り男子の代りとなつて、活動しなくてはならないことは、東西共に歴史に數多く傳はつてゐる。殊に國家危急の場合には、男子に代つて諸種萬端の作業を勤めねばならないことは、近く世界大戰爭に於て目前に見たことである。武家時代には、親、良人、兄弟の讎討に出た男まさりの女が澤山ある、

追分節　大沼辨天夜中に通りや馬の轡の音がする

此れは、北海道大沼公園の辨財天祠の傳說から來た唄である。昔アイヌ反亂の鎭定に、松前藩の一勇將が、拔駈の功名にあせつて大沼に馬を乘り入れた。所が、憐れ其沼は、菱、水草があつた爲めに、馬脚を搦められて空しく溺死した。殘念であつたに相違ない。其幽魂は、婦人を導き、沼の淺瀨を敎へて、討滅の功をなさしめ

たと云ふことである。大和女よ、つまらない鄙猥な俗謠を歌ふならば、此の哀れな辨天の追分節でも唄つてもらいたい。良妻、賢母、節婦の讎討等の例は數限りなくあるが、長編になるから此處には略する。

池田光政の妻

然し是非今一つ紹介して置きたいのは、本多忠利の娘で、備前の領主池田新太郎少將光政公の奥方が、平生姫君たちを敎戒された敎訓草である。

すべて女は男と異つて何事にも優しく、從順なが女の道である。如何に身分が人に越えて學問の才があればとて、決して男を凌ぐやうな振舞があつてはなりません。

衣服の裁縫は女の缺いてはならぬ事ですから、よしや自分が高貴の家に生れても裁縫だけを疎そかにしてはなりません。又無闇に自分の身を驕り高ぶりて、自分

は手を束ねて徒らに遊び暮しながら、仕事を人にいひ付けるやうな事は、女の役目に背いた事で、これは朝夕に別けて氣をつけねばならぬ事である。

又た人の妻となつた時は、格別に自分の身を愼しむで良人を敬ひ、たとひ顏容貌の醜い良人でも疎略に思ふてはなりません。

良人は外を治め、女は內を治めるのが世間の道である。そうであるから女に生れたものは平生儉約を守りて、よく家を整め、能く召使の者を憐み、家內を無事に納めて、良人に心配させぬ樣にせねばなりませんぞ。然し大名の家では、良人の外に、それ〴〵定まつた役人があつて、內の事も外の事も治めますから、女はただ〳〵良人を敬ひ、家來を可愛がつて、自分の身を愼むのが道である。古來から堅く戒められてある通り、女の第一に愼しまねばならぬのは、嫉妬である、よしや嫉妬の心が萌えても、よく〳〵愼しみ、心を責めて自分から自分を戒めて、少しも顏色へ出さぬやうにして、もし萬々一、良人に愛妾でもある時は、此方から

情をかけて仲よく交際するのが本妻の道、云はゞ女の道である。

又良人に仕損ひがあつたら、良人の機嫌の可い時を見計らうて、懇ろに諫めて見る、よしや良人が腹を立てゝ、怒られる事があつても、よく〳〵良人の機嫌を取りて、また後の日を見計らうて諫めてみる、一度よりは二度、二度よりは三度と度かさなるほど、良人も自然に改心して、自ら其過を改める樣になりますぞや。

又た人の貧乏なのと、金滿家とは、丁度、環のやうなもので、定りのないものですから、大名にも貧乏があれば、小身でも富者がある。貧乏ぢやとて、恥かしがるにも及ばんが、金滿家ぢやとて、驕るにも及ばぬ事、たゞ〳〵人間は自分が自分を知つて萬事に儉約をするのが宜しい。よしや百年連添ふ良人が貧乏でも、貧乏ゆゑに心を變へては女の道が立たぬ、その貧乏に安んじて、朝夕良人を救け、良人を慰めて、苦みも樂しみも一緒にするのが、これが眞實の女の節操、女の貞心である。

實際女子と云ふものは、どの方面から考へてみても、昔から云ふ通り、家に在つては女となり、嫁きては婦となり、子を生みては母となるべきものである。而して賢女ありて後に賢婦あり、賢婦ありて後に賢母あり、賢母ありて後に賢子孫ありで王化閨門に始まり、家人女の貞に利ありと云ふのは全くだ。

お腹は借り物だ

然るに何時の頃からか、お腹は借り物だなど云ふ言葉が日本文學に表はるゝ樣になつて、今も尙女子自らも平然として、母を疎外して父本位となし「兒の賢愚は父方の責任で、母方の責任でない、種によるのだ」などゝ云つて精子其の儘の發育とのみ考えてゐるものがあるが、此れは甚だ誤つたことで、其は婦人問題が民族生存の大問題であつて、其の賢愚は一國の消長に關し、社會國家に及ぼすの利害は、男子よりも一層直接であることを知らないからである。

家庭教育が母の責任であることは勿論であるが、傑れたる母は傑れたる子を生み平凡な母は平凡な子を生むことも亦た事實である。偶々不肖の父に傑い子の生れたときに、鳶が鷹を生んだなど云つて母方の心理狀態を顧みなかつた誤りであつたと思ふ。アブラハム、リンコルンの母を見ても、ナポレオン第一世の母を見ても、孟子の母でも、偉人の母は賢母であつたことは直に首肯さるゝことで、我國でも古來偉人の母が賢母であつた事は歷史に傳ふる處である。或は傳ふ靈夢を見て偉人を生んだと云ふことは事實其母も傑出した人であつたことを、其れとなく神秘的に說明したものではないかと思はれる。

米國にリチヤード、エドワードと云ふ人があつて、西曆千六百六十九年に、エリサベス、タツトルと云ふ才色兼備の妻を娶つて、チモシイ、エドワードと云ふ人を生んだ。プリンストン大學の總長であつて、米國の哲學神學文學を歐洲の感化から獨立させた程の大偉人、ジョナサン、エドワードは其人の兒である。ジョナサンの

子孫には、學德ある人々が生れて、次々にエール大學の總長となつたものが三人もある。ハーバート大學の教授で、胎生學の大家たるシイ、エス、マイノット、文豪ウイン、ストン、チャーチル等は、其後裔である。

女系の方にも大審院長モリス、ウエート、獨立宣言書署名の一人ベーン、副大統領エロンバーなど云ふ有名な人が出た。さて翻て、千六百九十一年賢母エリサベスが世を去り、リチャードは後妻にメリー、トーカッと云ふ甚だ平凡な女を貰つた。其間に生れたのは五男一女あつたが、何れも平凡兒、其また子孫も總て平凡、一人も優れたものがなかつたと云ふことである。此の事は遺傳學、胎生學、人種改良學上大切な調査であつて、米國ニユージャーシー州の人種改良學研究所主任、ダヴエンポールト氏の報告された事實である。

米國には未だ面白い事實が調査されてある。西暦千七百二十年、紐育にヂユウクと云ふ漁師が生れたが、此の男、大の怠惰者で、其男が生ませた五人の娘から五代

を重ねるうちに、一千二百人の子孫が出來るやうになつて、其怠け者の養育費に、米國政府は二百五十萬圓を支出してゐるとのことである。其内三百人は夭死し、殘り九百人中三百十人は唯もう怠ける一方、養育院の世話になつた者ばかり、其養育院に世話になつた日數を通算してみると、二千三百年にもなるさうだ。其外の四百四十人はやくざ者、百三十人は重罪犯人、六十人は盗賊、七人は人殺をした。又た婦人の多くは賣春婦になつたそうだ。此の厄介な家族を救濟する爲め、米國政府は今後もまだどの位費用を要するか、一寸勘定が出來ない位だと云ふことである。此れは、大正六年或る新聞で讀んだことであるが、現今の樣に虛榮虛飾に流れ、體質も精神も劣等に傾きつゝあるのを見ると、數代の後には世はあげてジユウ族の樣になりはせぬかと氣遣はるゝのである。

摩耶夫人

三千年前、世界で最も大なる宗教をたて、爾來幾億萬人の精靈を救つた、大聖釋迦尼佛を生んだ摩耶夫人は、日子即ち太陽の子孫を以て任じてゐた、シャカ族の王城たるコリー城に生れたもので、ロシニー川を挾んで、釋尊の父淨汎王のゐたカビラ城に嫁入されたものである。結婚年齡は不明であるが、印度の習慣からみても十歲未滿であつたらうと思ふ、而して姙娠されたのは四十五歲の時である。摩耶夫人は產月が近づいて、鄕里コリーに歸つて產褥につく爲め、カビラ城を出發したのであつたが、途中で產氣つき、藍毗尼園と云ふ所に入つて、高く聳えた無憂樹の凉しい木蔭で玉の樣な男の子を產み落した。夫れが釋尊である。カビラ城の喜びは一通りでなかつた、所が摩耶夫人は、不幸にも一週間後に亡くなられた爲に、太子たりし釋尊は繼母に守り育てられ、バラモン敎の名士を聘して敎育を受けさせられたのである。然し由緒深き母の血統に生れたる釋尊は、幼少の頃から普通の人物ではなかつた、非凡な素質を持つてゐたのである。大宇宙を家とせられた此の大宗敎家

の一生を考ふると共に、吾人は日子たりし摩耶夫人の腹も非凡ではなかつたらうと思はるゝのである。

張華の女史戒

張華の女史戒の中に、人は容貌を飾るのを知つて自分の性質を飾ることを知らないと云ふことがあるが、誰でも一口に形よりも心と云ふことは云ふが、實行は反對である。今や滔々たる奢侈の風は天下に瀰漫し、何も彼も忘れて男女共に奢侈の競爭となり、虛榮、虛飾の絕頂に達し、殆んど俳優か、藝妓か、素人か區別がつかない程である。識者の眼から見たら、其無能と愚劣さは實に愍笑に堪へないと云はんよりは、寧ろ杞憂に堪へないのである。更に云ふ、現在我國の如き漸次劣等に傾きつゝある國民の體質と精神を、如何にして救ひ得るのであらうか、是れ至誠、憂國の士たるものゝ、寸時も默視し得ざる一大事件である。

梅が香を櫻の花に匂はせて
柳の枝にさかせてしかも

衣通姫、弟橘姫、靜御前、虎御前の如きは容貌の優美なると共に精神の美を備へたもので、眞に日本婦人の美を遺憾なく表明したものと思ふ、唯ケバ〳〵しい魅惑に富んだ化粧着付は誘惑的魔物である、彼れらは自ら罪惡を作り、貞操を破るものである。

如何な家庭にも讀み得る記事

大正十一年七月二十七日新愛知新聞に次の記事を發見した、世上一般斯うした氣分になつて欲しいのである。而して、ま一つ無理であるかも知らんが、新聞にも斬つたとか殺したとか、乃至痴情、淫猥の記事を傳ふるよりか、如何な家庭にも讀み得る記事を多くすることを希望するのである。

一時は生活改善だとか、産兒制限だとか、種々な社會問題婦人問題だとか、ふたゝ上調子な外面的な叫びをあげて、われも〳〵と社交界の花形をきどり、やんやとおだてあげられて、自己の虚榮心を滿足せしめてゐた哀れな大阪の所謂社交界の夫人達が、それ自らの性的生活を調節する一策として、社交タンスをまで案じたが、汗みづくになつて難關をきりぬけて高山に登つたとて、頂上までゆけば、降らねばならぬのと等しく、社交界の夫人達の上調子な虚榮心にも多少の弛みが生じたのか、そろ〳〵と曉方近くで夢がさめはじめたのか、內面的生活、自己の充實、といふ事をしきりに考へはじめたのは、あまり遠からぬ初夏の頃、社交界の有象無象が聲を揃へて「これではいけない」と叫び出てた、一頃一週に六度七度位何々會、何々會と云つて、ほとんど家を忘れて外出してゐられた名流夫人さへ、もはや一週に一度の外出があるかなきかといふ調子で、ほとんど飛び歩きまはる夫人は無くなり、家庭本位として落ちついた事をはじめたので、あゝさうなると今迄氣づかなかつた

子供達の勉强振りや行儀作法、召使の事など、樣々な缺點を見出し得るにつれては自らの修養ともなり、又主人達の悅に入るものさへも數多くなつてきた。しかしそこには多少のはきちがひ、感違ひをして、私は淸元私は一中と、何の糞にも足らぬ事に熱中し始めた向も少くはないが、何と云つても大阪の代表的な知識階級の夫人達は、內面的の充實に勉めて、一時の流行に支配されなくなつて來た、これは誠に喜悅に堪へない事で、この殊勝な心がけが、永久に持續されん事を祈るのである。

其後女子の結婚を論じて次の記事があつた。同感である。

女子の結婚年齡は凡そ何歲位が適當であるかと云ふことは一樣に言ふ事は出來ない、女子其人の個性に依つて各相違があるのであつて、早熟の者は十數歲の時に可能性があり、然らざる者は二十歲以上になつても早過ぎる位である、又氣候や風土にも大なる關係があるので、一體に暖國は早く寒國は遲い傾向がある、單に生理的から考へて見ると、結婚に差支ないといふのは十四五歲ならば大丈夫であつて、日

本の民法でも女子は十五歲以上に結婚を許容してゐるのである、今日では十五歲や十六歲で結婚する事は早婚だと云ふ者が多數である樣であるが、之が爲大なる弊害を認めてはゐない樣である。

併し之れは單に結婚と云ふ事を生理的に見たのであるが、今日の所謂文化生活を行ふものから見ると、如何なものであらうか、即ち文化人としての結婚をするには、先づ妻として又母親としての資格が具備されてゐるか否かを見ねばならない妻としては夫の相談相手であり、母となつては其子の爲に第一の敎育者であり、一家の財政經濟の支配者であり、親戚近隣に對しては代表的の外交官であるのであるから、女子一人の兩肩には極めて重大な責任が被さつてゐるのである、故に餘程才德の縱橫に働き得る女子でなくては、之丈けの仕事を一人して脊負つて行く譯には行かないのである。

斯う云ふ次第であるから十四五歲迄には到底其準備を整へる事は不可能である、

だから此方面耳から觀察すれば、女子の結婚年齡は如上の準備が出來上る迄である
と云ひたいが、之れでも足らぬ之れでも不充分だと云つて、準備ばかりしてゐたの
では、徒らに年を重ねて終ふ許しである、結婚を要求する男子側からの立場に於て
見る時には、文化的教養のある婦人を要求するのは無論であるけれ共、又生理的に
も審美的にも要求する點があるのである。

此點からして、女子の容貌も亦重要なる要素と謂ふべきである、容貌は天性にも
依るのであるが、所謂鬼も十八番茶も出花と云ふ頃が女子としては最も美しく見
える時である、即ち女子は十八九から二十、二十一、二と云ふ時代が最も美しい、
故に大抵の男子は結婚の相手として此年頃の婦人を求める樣である。

今日ではサンガー女史などの樣に產兒制限を唱へる人も出て來てゐるが、夫れが
多少理由あるにしても、其第一原因たるべき結婚を、なるべく少くする爲に、年齡
の標準を三十とか四十とかに低下する事は到底不可能であらう。

第二篇

一　着物

日本の着物は、上古神代の頃は、科と云ふ木や、麻や、楮の皮を剝ぎとりて、打
ち柔げ、細く裂て衣に織つたもので、其の布を木綿と呼んで、繭から採つた糸で織
つた布を絹を云ふに對照した、今の木綿はもと唐土より輸入したもので、當時は之
を草綿と呼んで居たが、後にゆふを製する事が止んで麻布と草綿の布のみになつた、
其形は恰度、洋服に類した實用的のもので、貴賤上下の差別と云つても唯だ織物に
僅かの優劣があつた位に止つた樣に思はれる。

其後三韓と交通するに至つて、漸次寛い裝飾的な着物となり、玉を附け冠を戴き、
さては冠に玉を飾ることになり、三韓征伐後は、織布も裁縫も發達し、麒麟錦と云

ふ錦もあつた。其後文武、元明天皇の頃は制衣冠司を置き着物寸法などもきめたこともある。既に隋唐と交通した頃は、長袖長袴の衣服を着る樣になつた。即ち聖德太子の御着用になつたのは此の類である。

衣裳と云つたのは實に唐人の着物である。處が、鳥羽帝の代になつて、帝は之を日本化して、別に裝束を作られたが、それから戰國時代になつて織田信長が袖の大きい直垂を不便として其の袖を取除いたのが袴で、當時の袴から見ると、德川氏の袴は肩が大分張つて來て、之を突らせる爲に鯨まで入れた、かく衣服は總て實用から裝飾に變じて行くものである。

女子の着物は往古から衣と裳とであつた。孝德天皇大化の新政を發してより四五十年、持統天皇の朝に至つては、朝服の制定がある。爾來十年元正天皇の朝には今迄女子は左り前に襟を合せたものを、唐風に倣つて男子とも右衽にし、それより引續き聖武天皇の朝には、天下の婦女に命じて新樣の服を着用せしめたと云ふ。或は

裳を重着するものありし爲め、裏裳を禁じたことがある。中世までは都鄙一般に女子は紅袴を穿いたものであつたが、南北朝以來戰亂打ち續き、さては衣を得て裳なきを顧みるに暇なく其れが因襲の久しかりし結果、漸次衣を長くして裳を廢するに至つたものである。既に慶長以後延寶の頃に至つては、中結の帶が漸く幅廣になり、元祿の盛況を經て、全く現今の樣な着物を形づくつたものである。今では西洋服を着る女も多くなつたが、反て衣と裳とを別に作つた本朝の舊制に返つた樣な氣分がある。

元より此の服裝の變遷は、他國との交際上の便宜から來たもので、現に支那の古畫を見ると、推古帝時代のものと大差ないものを見出す、武家の世となつてから時代的に變遷し、既に德川の代となると貴賤上下の差別もはげしくなり、贅澤も亦甚しくなつて、獨りで幾樣かの衣服を貯へ、其れに種々意匠を凝したものである。德川三百年は、八代將軍吉宗公の樣な名君もあつたが、つまり、太平は反つて贅澤

の世の中となり、總ての點に於て國家の損耗計り知るべからざる者があつたのである。よしや、贅澤は贅澤として、若しも此の三百年が、海外に發展して居つたならば、南へ南へと勢力を扶植して、南洋諸島は無論のこと、濠州邊までも手をのばしたであらう。

私は再び云ふ、我國の上古は萬事士民の別なく、國民皆兵にして、事無ければ家に在りて業に從ひ、一朝有事に際しては皆、兵器を提て軍陣に臨み、家に在つては親に孝なる如く、陣に在つては君に忠を盡したもので、誠に雍々熙々一家の親、洵々穆々主從の誼ありしは、建國以來大和民族の國是である。然るに、其の後王朝の末年から武士てふ一階級を生じ、制度の弊、武門の專横、朝廷の衰微となり、恐れ多くも禁裡三萬石に過ぎざりしの一事に至りては、憤慨の極である。幾多の國學者、漢學者は天下の志士となり、苦心慘憺、血を以て勤王的精神を扶植鼓吹し、維新の改革を成就せしめた。而して、細戈千足の國、浦安國の實を得て、今の天皇陛下は

大元帥におはし、皇族はみな武官にまします。知らず、文明の甘酒は何時しか官僚政治となり、藩閥と政黨との爭となつて、著しく民業の發展を沮害して居るのである。今や其極に達し、國家の損耗は武家政治と其大差ないのである。而も、官にあるものは裏面に弱味があつて、富豪の贅澤を止めることができない。彼等は富豪の後援によつて立つて居るのだから、萬事富豪の意のまゝである。唯々利己主義を營んで現官の時から身の捨場所を考へて居る。余は思らく、所謂 Democracy なるものを幾度か鍛練し以て、我が國體的に改良したらんには、藩閥、學閥、或は、政黨閥、勞働閥もなく、國民は意志のまゝに發展し、上古のそれの如く改造せられ、さては上下一致忠孝一本の實現を見ることを得るではなからうかと夢みつゝゐるのである。

忠臣藏の主人公大石良雄が山科閑居の時、風流に事よせて時の右大臣近衞家熙公は、屢々微行して良雄の居を訪ふた。而して、良雄に復仇の意志あるを察して、人

知れず其身邊の保護に心を盡してゐた。さすがの良雄も右大臣たるべきものが、何故に自分を助くのであるか、其意味がわからない、或日復仇の志を訊ねられたが、他意なしと云つて一切を秘して語らなかつた。家熙公は不興、良雄は今更當惑した。「然らば復讐するとせば如何遊ばす」と聞くと、家熙公は、「おん身の志を助け得さする」とのこと。然し良雄は國家と云ふことに考及ばなかつたから、其の助けるは何が爲であるか解らない。更に、「お助け遊ばすは如何なる御所存で」と重ねて聞くと、「たゞ御國の爲めを念ふて」良雄は「ははあ」とばかり、案外であつた。「國家の元氣を振起させたい計りに」良雄は「はッ」とばかりに打ち驚き、感極まつてハラハラと落涙、近衞右大臣の英邁にして識見高きに良雄は只々恐れ入つた。家熙公更に、「古來我國は尙武の國たるは尊き神器に神劍あるをみても明である。されば、苟も腰に兩刀を挾む者は武德を保つべき筈なるに、今の世は武人も文弱に流れ、淫靡柔惰の風日に甚しく、實に此の元祿の時代は末法墮落の世となつた。余が其方の復仇

を希ふは其義擧によつて國家の元氣を振起したいのぢや」良雄益々感激し、「御芳志心魂に徹するも、私等は只主從の關係のみ、國家の元氣を振起するなどゝ云ふ考は」と答ふると、「それでよい、なれど春來れば花は咲き、花咲けば春を彩る、知らず赤穗の大石內藏助讐を討つたと云ふことが懦夫を起たしめる警訓となる、わざとらしからぬ自然の妙味がそこにある(乃木式)。嗚呼今の世の良雄、今の世の家熙公は何所に居るか、着物の話しが變な處に脫線したが、此處らで止めて置かんと御目玉を頂戴する。

將軍吉宗公が世をさられた後の事である。江戸の人々は贅澤のあらん限りをつくし、吉原扇屋の瀨川太夫と云ふ遊女などは、上衣に、ごく薄く打ちのばした銀の糸で織つた西洋風の綾衣を着、誰でも「まア美しい御召物だ」と褒めると、「こんなものは仕樣がありません」と、わざとビリビリと引き裂く、すると其下から、まつてましたとばかり、鳶色の天絨鵞へ而も牡丹に狂ひ獅子を、五色の唐系で總刺繍にした、

眼がさめるばかりの裲襠が現はれると云ふやうな見得を飾つたと云ふ。尙ほ驚くのは此の裲襠とても僅か四、五日間着て取りかへたものだそうだ。

文政時代、やはり吉原の遊女、岡本樓の太夫で、菖蒲の咲いてゐる時分に、幇間に「お前あの花を剪つて呉んなまし」と剪刀を渡した、幇間は何心なく、「へイ、へイ」と庭下駄をつつかけ池の汀へすゝむと、太夫その後から、そつと忍び寄つて、いきなり幇間の背をしたゝかに突く。不意をうたれて幇間は、一たまりもなく、池の中へ、ざんぶとばかり落込む。無論、池は淺いので生命には別狀はないが、どぶ鼠となつて這ひ上る。「花魁ひどい、惡戯で御ざります」と恨みを云ふ。太夫は振り向きもせずに、「子供や此の人に着換を上げなまし」と云ふ言葉の下から、禿や新造が、羽二重に花魁の定紋つけた羽織、着物、それから下に着るものまで一切、それに相當したものを揃へて、亂れ筥に載せて持ち出し、幇間の前に置く、幇間は「こんな事なら幾度でも突落されませう。」後は笑となつたと云ふことがある。

支那の宦官は財慾の爲めに去勢まで忍んで志願したと云ふから、どぶ鼠の藝とう位何とも思はなかつたのは不思議ではない。近世贅澤の骨頂を極めた人で、京橋山城河岸の大盡津藤と云はれた、津の國屋藤兵衞と云ふものがあつた。津藤一日、大門通りの大丸屋呉服店へ、ぶらりとやつて來た。見世では、津藤大盡の御入來とあつて、下にも置かず「何か御用は」と承ると、「お前の店の結城紬の變つた柄を、すつかり此處へ出してくれ」一體結城紬はぢみなもので、それほど變つたものはない、選り分けて都合五十餘反を出した。すると津藤「鋏刀を貸してくれ」と自分で鋏刀をとりあげ、手當り次第にチョキ〳〵五十餘反を剪り散らして了つた。店の者は目を圓くして驚いた、津藤は一向平氣で、其種々の小切れを無雜作に、くるくると一纏めにして、「これをはぎ合して褞袍にしてくれと云つて、代金を拂て立つた」「剪り殘しは御宅へ御屆け致しませうか」と聞くと、「馬鹿な事を云つちや不可ないお前だちは肴の骨を大事にとつて置くか」と云ひ捨てゝ立ち去つたので、大丸屋の

番公開いた口が塞がらなかつたそうだ。津藤がこの五十餘反で出來た褞袍を着て居ると、或日、河竹默阿彌がやつて來た。横目にぢろりと見たばかりで、褞袍については一言も云はずに、用談だけして、いざ歸らうと、既に上り框まで行つて下駄を穿かうとした時、津藤、默阿彌を呼びとめ、「これをお前さんに遣りましよう」と、褞袍をぬいで差し出した。「何んでこれを私に下さるんですか」、「これ程凝つた品物をぢろりと見たばかりで氣に止めなかつた、「お前の氣が嬉しいから、遣るのだ」默阿彌門に出てから微笑して、赤い舌をぺろり

維新間際の頃は、殺氣世に滿ちて風腥く、德川三百年の太平は賴み少くなり、憂國の叫びは全國に喧しく、贅澤どころではなく、命の問題となつた。廢藩置縣になるまでは、各藩から近衛の武士を出して交代せしめたものだつたが、當時、近衛の武士たりし老爺の物語を聞くに、其頃京都などの市街は實に殺風景なもので、各商店などは大きな簾を間口に立てかけて、僅かの所から出入し、唯の一軒も賑かに商

賣して居るものはなかつた。商家の柱には、刀痕のないのはない位、一晩に五人切られて居つた、六人殺されたと云ふ物騷なもので、祇園の藝者なども、顏だけ出して頭巾を被り、其儘、客の座敷に表はれる。だから藝妓のよしあしは、袖口の數で判斷した位のもの、從て驕奢の風は頓に一掃されて、唯だ殺伐の世となつた。

近衛の武士は各藩から集つたもので、或は僧侶が坊主頭に鉢卷して御守衛に任じたのもある。其何藩であるかは服裝でわかつた、土州などは其内でも立派な方で、刀なども柄を長くし反りを打たせたものだ。細川藩も立派な方で、黑の襟をかけて居つたから、一見わかつた、薩州は最も質素で、鎧の下帶よろしくと云つた樣な木綿の兵兒帶に、反りのない短かき刀をさして居たものである。而して、近衛の武士は常に一列になつて歩いたが、立派な强さうなのが來ると、自然に道を避けたものである。中には、柄を長く見せる爲に、柄袋の下に足し木をして强さうに見せ掛けたと云ふ滑稽者もある。一般に云ふと、質素で、着物は、けんぼうの羊羹色になつた

のを粋とし、袴は短きを尙んだと云ふ風であつた。夏季などは、一般に白地にして綿紗に貼紋して着たものもある。然し、公家はさすがに立派な服裝で、伴一人二人連れたのが、大勢を引俱せる武家に對して、如何にも傲慢に武家の厚き禮をなすに向つて、唯だ目禮をしたのみで通つて行く樣の誠に面憎くかつたと云ふことである。

明治時代、朝野に兩翼をはつて他藩の羨望を恣にした薩長の士は、一朝一夕に仕上げたものではない、朝廷、幕府、或は攘夷、開國、或は勤王、佐幕、乃至公武周旋など世の中が喧ましくなつた頃から、兩藩とも勤王に心ざして、全藩一致協力し上は藩主から下農民に至るまで、出來るだけの質素をなし文武をはげみ、他藩の力を藉らずして外敵を引き受けやうと覺悟し、場合によつては德川の天下に對抗するの勇氣を示した。そして藩主初め、淺黃木綿の着物に白地小倉の袴をきて、食事は勿論、酒も烟草も節約したものである。終に維新の大革命は、彼れらの手によつて

大成された。日本歷史中、恐らく此の時ほど讀て面白いものはなかろう、要するに薩長が他藩に傑出した所以のものは、他藩に眞似の出來なかつた儉約、一致、武勇勤王愛國の精神を以て一貫して居つたからである。今や歷史は繰り返されんとして居るのであるが、勤王、儉約を說く月性上人も居なければ、吉田松蔭も、賴三樹も林民部も、高杉晉作も、西鄕も、木戸もゐない、乃木大將も神となつた。誰かまた身をすてゝ、勤王儉約を叫び、危險思想を一掃し、國家を泰山の安きに置く人がある。

武士から思出したが、故鄕に錦を飾ると云ふことに就て、哀れにも優しき談がある。それは、壽永二年二月廿日、如賀江沼郡篠原附近に行はれた源平の合戰に、平家の軍は散々に敗北し逃走する中に、齋藤實盛は只一騎踏み留りて防戰し、手塚太郎光盛と引き組んで討死した。然し實盛は決して姓名を名乘らなかつた。されど、實盛此の日のいでたちは赤地の錦の直垂に、萠黃縅の鎧を着、鍬形打つたる甲を被

り、黄金造りの太刀を佩き、二十四さしたる切り班の矢に重藤の弓を携へ、連錢芦毛の馬に金覆輪の鞍を置いたれば、平家の名ある大將たるは明である。義仲不審に思ひ、鬢髭の墨にて染めたるは合點ゆかずと、首を洗はせたるに、雪を欺く白髮であつた、依て其實盛たるを知り昔日の感慨、流涕瀧の如くあつたと云ふ。實盛北國へ下るに際し、豫て打死を覺悟し、生國は越前である、故郷へは錦を着て歸ると云ふこともあればとて、特に請ふて錦の直垂を許され、斯くは立派やかなる出立をしたのだと云ふ。墨で白髮を染めたのは、七十にも餘る老武士が、若者に交りて先駈けせんも大人氣なしとてなりと云ふ遊如寺の僧侶は、此土地を通過するときは必ず實盛塚に立寄つて參拜して行く。今の古稀連中實盛の眞似が出來ますか。

日露戰爭の時、第九師團へ召集された江沼郡の在郷兵士が、夥多の人に送られて大聖寺驛を出發した時は、それは〳〵悲慘な狀景であつた。萬歳を叫ぶものゝ實は泣聲、眼からは大粒の涙が取り止めもなく落つる。其中に七十歳餘の汚れた服の老

爺一人、平氣なもので、涙一滴も落さず、愈々汽車が動き出した時に、二本の指を出して、此れも汚ない服の悴らしい車中の一若者に、『野郎此れを忘れるな』。野郎は『うゝ』と腕を二三度ふつて見せた。其内に汽車は勢よく出發し、汽車も野郎も去り、殘るは煙と送人ばかりになつた。尙ほ泣聲と涙は停車場に滿ちて、暫くは止まない。老爺は頭をふりつゝ、獨り笑みつゝ停車場を出ようとする、先程から此の樣子をみて居た巡査一人、何思つたか老爺を呼びとめ、

『お前は涙も出さず泣きもしないが、今見送りしたのは御前の悴か。』

爺『はい〳〵左樣でございます、國の爲めに悴も御役に立たうと云ふ、此の位嬉しい事はございません。泣くどころではありません。』

巡『然し爺、二本の指を出して悴に見せたのは何の爲めだ。』

爺『ハゝア……あれでがすかい、あれは不斷から悴に云ひ聞かせて置いた事で、戰爭に行つたときは、敵を一人殺して死んだのでは元々だ、何でも二人殺して死ね

ば一人だけは國の爲めになる、必ず忘れるなと、戰爭くさくなつた時から、始終二本の指で數へて置きました、それで別れるときも二本の指を出して、此れを忘れるなと云つたのでがす。』

感心な親子である。身には粗服をまとふても心は錦である。黑崎のものとのみ聞いたが、名を聞き漏らしたのは誠に殘念である。

終りに臨み大轉して世界中で最も合理的の服裝と云ふ、國立榮養研究所長佐伯理學博士の談を紹介する。

現在の日本人は一人平均、生活費の四十パーセント(即ち四割)の食費を費してゐる。之に比較すると住宅難の聲は高いやうだが、住宅費が同じく一人平均二〇パーセントであるのは、如何にも食つて生きることが人間生活の重きを爲してゐるかを示してゐる。しかし乍ら英米の如きは生活費に對する食費のパーセンテージ(割合)は、もつと高い、私共をして云はしむれば、食費は生活費總額の七十乃至八十パー

セント迄費さなければ、ほんとうでないと思ふ。節約などゝ云ふも合理的節約でなければ何にもならない。日本人の生活も衣食住とも、眞劍に根本的に改良してかゝる必要がある。生活樣式の改良に就ては私は日本は結局、和洋折衷式でなければならぬと思ふ。住宅でも衣食でもすべて洋化してしまふとは私には思はれない。住宅を洋式にして疊を牀に改めても、日本のやうな道の惡い國では雨の日などは土足で上へは上れないことになる。衣服にしたつて私たちが見て洋服程不經濟なものはない。洋服といへば服裝に就いて最近私が思ひ付いたことだが、世界中で最も進化した、そして經濟的なる服裝はと云へばそれは法被である、法被は第一、あの腹かけのドンブリが腹を冷さない。即ち保溫裝置が充分である、尙ポケットが澤山あつて洋服に劣らないばかりか、運動にも輕快で、しかも堅牢で、頗る經濟的である。ナニ美觀を害するつて、イヤ改良を加へれば完全になる。それにつけても人々は思ひ出す事があるだらう。あの英國皇太子殿下が御來朝の折、早速法被に注目されて、

本國へお持ち歸りになつて、ロンドンで爾來會合などに着用されることがあるさうだ。

二　下　駄

下駄、下駄屋と云ふと、足にかゝるもの、其れを取り扱ふと云ふ意味から、昔より兎角評判わるく、至つて下品のものとして扱はれて來た時代もある。跣で飛びあるく土人の類や、靴をはく人間には不用だらう、大和民族も古はそうであつたが、靴や草鞋が出來て、草履が出來て、中古から下駄が出來たのである。初めは便宜な所から全國に流行し、さては無くてならぬ日用品となつたのである。從て好い者も出來、進歩もし贅澤になりて、今では誰も卑しむものはない。

下駄の行はるゝに至つたことは、隨分古い昔からで、實は誰が作り出したか知らないが、昔は火箸の樣なものを燒いて鼻緒の穴をあけた時代もあつたことは、職人

盡歌合と云ふ書物の「あしだつくり」の繪にもある。而して馬下駄と云つたのは、今の駒下駄のことを云つたものゝ樣である。

小野道風は、繪にも人形にも、高下駄を穿いて蛇の目傘をさして、柳の下に蛙を見て居る。日本外史を讀んだ人は、誰でも知つて居る、平清盛が西光を叱して下奴と云ひ、過分と云つた時。西光笑て云ふよう、何を過分と云ふか、公の父但馬守は朝官の齒するを愧づる所、其嫡子たる公は常に高履を着けて中御門氏に伺候したから、人呼で高平太と云つたではないか、海賊二十人程を捕へた功で四位兵衞佐と爲つたのは、人は異數だと云つて居る。後ち太政大臣までなつた、是れを之れ過分と云ふのだと罵つたのを見ると、清盛も高下駄を穿いた。白河上皇が鬼髮束鍼の怪物とみた老僧を、清盛の父忠盛が捕へた時の繪にも、高下駄を穿いて居る樣に心得て居る。牛若丸が五條橋で辨慶を降參させた所謂橋辨慶でも、牛若丸は高下駄を穿くことになつて居る。然し牛若丸は草履を穿いて居たのが本當だと云ふ。調べてみる

と、此樣な事は數限りなくある。

著聞集と云ふ本には、小殿平六は「ひら足駄」を穿き、遊女かねは高い足駄を穿いて走り馬の手綱を踏んだと云ふことがある。寛永の頃は、上方から江戸へ種々の意匠を凝らした塗下駄が下つて來たもので、女下駄が多かつたと云ふことである。

天保の改革に當つて、贅澤の廉を以て召し上げられた藝者の下駄は、隨分立派なものがあつて、中には臺の横に抽斗があつて、それをあけると白縮緬のきれが入つてゐる、それで足の汚れを拭くと云ふ仕掛だ、而して鼻緒は白の絲を揃へた上に、其間を珊瑚珠を幾つも通してあつたり、或は表は鼈甲にして横は金の高蒔繪をほどこし、臺の中は湯水を入るゝ樣になつて居て、寒暑に穿いて足の冷熱を防ぐやうに仕たものだそうだ。此の樣な下駄があるから下駄と云つても、一口には云はれぬものである。浮世繪のおいらんの下駄を見ても、三枚齒の塗下駄で、高大なものである。今でも島原太夫の道中を見た人は、八文字を踏んで行く下駄を覺てゐるだら

う。

又た下駄は古來商家によりて特種の意匠を凝して名稱を附したもので、東京淺草橋の香取屋などは、數十種の名稱を有するとの事である。足駄、日和下駄、駒下駄、薩摩下駄、吾妻下駄などは誰でも知つて居る。北陸では高下駄を足駄と云つて、駒下駄を下駄と云つて居る。今も天氣が好いと、今日は「げだばき」だと云ふ。面白いのは、瓢の下駄と云ふのがある。此れは昔、茶人などが瓢簞で下駄をつくつて、庭や路次に穿いて御好みにした物である。小兒の乘る竹馬も下駄の一種で、竹馬の友とは能く云つたものだ、處が實際竹馬ばかりではない、竹の下駄も古來あつたもので、小兒の雪すべりに、又は雪隱や路次などに風流に使はれたものである。

冷かや湯殿へ通ふ竹の下駄

柳　風

三浦屋の高尾にうつゝを抜かした仙臺樣は、伽羅の下駄を穿いて通よつたが、吉原の燒芋屋で無錢喰をやつた爲めに、質に取られ、取りに行かなかつた所から、芋

竈の下に燃かれ、吉原中香つたと云ふ事がある。其眞僞は急かに判じ難いが、何れ大名の下駄などは贅澤なものであつたに相違ない。特に八代將軍吉宗公が世を去つた後は思ひやらるゝ程贅澤であつた事だろうと想像することができる。

名譽の下駄と云ひたいのは、明治の初め人も知る、泉州境港は妙國寺で、物の美事に屠腹して、赤髯奴の心膽を寒からしめた土佐の簑浦隊長初め二十有餘人の巡羅一隊が、其日士分となりて穿いた下駄である。此の話しを思出すたびに、吾人は切齒扼腕、慷慨悲憤にたへない。嗚呼、千古の偉觀、花は櫻木、人は武士、我國の精華を遺憾なく標榜した唯一の典型である。世上、腸の腐つた奴は、妙國寺に行つて此の勇士の墓前に跪き、腹の洗濯をして來い。顏の皮の厚い、蛙の顏に小便と云つた樣な奴等は、昔ならば武士の切り捨て御免に付して見たい樣な氣がする、今も警察が默許することになれば、昔堅氣の人物は毎日二十や三十人は切つてみたいと腕がうなるだろふ。

佛國では Rallymerchant は死刑にすると云ふことが議會にのぼつた事がある、と聞いたが、誠に Excellency である。我國でもちよい〳〵奸商を取締つてはゐるやうではある、先進國たる日本帝國も、昔通りにしたものである。大正八年八月二十八日の新聞に、此の頃米國下院は食糧品、燃料、其製造機械に關して暴利を貪りたるものに對して、五千弗の罰金又は二箇年の禁錮を科せんとする暴利取締令を可決したと云ふ。

蒲生君平は外出に際して、必ず高下駄を穿いたものだそうだが、曰く、途中書を讀みつゝ歩くから、犬や馬の糞を蹈むの恐れあるから按摩の故智に倣つたのだ。君平嘗て藩主戸田邸の通用門を、例の高下駄で讀書しながら下駄音高く踏み鳴らし通る、藩規に反くものなりとあつて門番の咎めを受けた。百方御謝びしても聽入れられず、困りはてたる處へ、執政戸田某來合せて、漸く其罪を免されたと云ふことがある。さすがに、君平は慷慨憂國の士である。此の下駄なかりせば、恐らく、天下

を遊説し、到る處に於て、保建大記を講義することは出來なかつたであろう。

御芝居では、どういふものか昔から草履が大流行、下駄を穿くのは甚だ少い。慶安太平記の堀端で、江戸の大將丸橋忠彌が、煙管の御堀測量をやる、其處へ、松平伊豆守が出塲するんだが、二人共高下駄を穿いて、伊豆守は傘、忠彌は饅頭笠をもつて出る。忠臣藏では、上杉の附け人清水一角が住家の處で、一角が酔つてしらをきる、高下駄に蜿ノ目傘、酔歩蹣跚よろしくある處何れも面白い芝居だ。櫻時雨の狂言では、灰屋紹由は高下駄を穿いて杖をついて出る。それから、座頭、按摩さんは何時も高下駄と杖は御定りであるが、壺坂の澤市は、たしか草履であつた、俄ら目くで歩行が危ないからであるのか。

三　米

我大日本帝國は、元來瑞穗國といつて、農を國の本とし、尊重し來りしことは、

苟も大和民族たるものは、誰しも知る所である。彼のゲルマン民族やバイキング族の如き、山賊、海賊を本位とし、牧畜を業とせし民族と著しい相違がある。歴史に傳ふるが如く、かしこくも、皇祖天照大神が親ら御田を御作りになつて、新嘗をあそばしたと云ふことを見ても、我々大和民族の最初から米があつて、其れを主食とした農本位の一大家族國たりしことは確かである。年々の新嘗祭は、其年の新穀を御供へになつて、陛下御親らも召上らるゝもので、皇祖天照大神を始め奉り、天地の神々を祭らせたまふ重き祭祀であつて、呪咀深き異國の風を少しも採用しない、上古の遺風其まゝの國祭は此の新嘗祭ばかりである。

されば、御即位式の時に行はせらるゝ大嘗祭は、最も式中の重大なる祭祀であつて、御供用になるための米穀を作る田は、齋田と申して豫て二つの地方に御定になる。即ち悠紀齋田、主基齋田と云つて、清淨を意味し、耕作に從事する人々も常に身を清淨にして、服も改め、田植、草取、拔穗等夫々式がありまして、つゆおろそか

にしない尊い農事である。而して、其一部分を御飯の御料と定め、他は白酒、黒酒の御料に定められ、新に御造營になる大嘗宮で祭らるゝ。御親祭の前、陛下は御湯を召し、御服を御換へになる。此の御湯所を廻立殿と申しますが、大嘗宮と共に誠に質素な壁がない莚張り屋根は萱葺の神々しいものである。夕の御祭が濟み、朝の御祭が濟み、斯くして即位の禮が全く御濟みになり、大嘗祭が終りますると、參列した皇族初め群臣に大饗と申しまして、彼の清淨なる御飯、白酒、黒酒を分ち賜はるのである。其日御盛儀に御召にならない臣僚には、地方賜饌と申しまして、各地方毎に會場を御定めになつて、饗饌を賜はる。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等七五三龜吉、去大正四年十一月十六日、此の千載一遇の大典に會し、其日正午、石川縣々會議事堂に於て御賜饌の光榮に浴し得たるは、一世一代の譽れ、家門の光榮、實に言語に盡されず、今も尙ほ當時の紀念を拜しつつあると共に、忠君愛國、社會奉仕の念を忘れまいとするのである。

其年悠紀主基齋田の田植式は、六月五日に行はれ、耕作者植女等三十人、太鼓を合圖に田植歌をうたふて植初をしたと承る。當日その盛況を拜觀せんとて、蝟集し來つた男女の數は愛知縣の一方だけでも五萬人以上もあつたと云ふ事である。

悠紀齊田愛知縣碧海郡六ッ美村田植歌

今日のよい日の御田植初、稻の萬歲御代の數、やがて世界のむつみの種も、悠紀の御田より出るやうに、菅の小笠に揃の着物、苗もそろへば氣も揃ふ、三河萬歲萬歲稻の、穗に穗出るよに祈らんしよ。早苗植えましよ、眞直に植えよ。直は神樣およろこび

主基齋田香川縣綾歌郡山田村田植歌

讃岐山田はよい米どころ、主基の御田はわけてよい。水も豐かに御田に入れば、露の玉苗うるはしや。袂列ねて植えつゝ祈る、みのる瑞穗をさゝげんと

地鎭祭が八十五日に行はれ、拔穗式は主基齋田が九月十八日、悠紀齋田が九月二

十日に擧行されたのであつた。

奉祝歌

天地のむた窮みなき天津日嗣の御位に、我大君の登ります今日の御典の尊さよ、
足穂の稻大御饌に白酒黑酒を取りそへて、皇御神にさゝげます大御祭のかしこさ
よ、大き正しき君が代の大御祝に外國の、つかはし人も列なりて共にことぼぐめ
でたさよ

萬世一系の天皇の統治したまふ世界無比の國體を有する所、國民も亦た世々忠孝を勵みて皇室に事へ奉り、以て千古の美風をなせる我大日本帝國なればこそ、此の世界未曾有の盛典を奉祝し得たのである。皇祖以來、上初め臣民に至るまで、米を主食とすることは、此の大嘗祭と毎年行はせたまふ新嘗祭を見ても判かる。世界で我國以外に米を食ふ人間は案外夥多あるが、主食ではない。終始米を主食として居る人間は日本人ばかりである、明治年代より歐米の文物を輸入してから、洋食など

流行し來つて大和民族の胃腸を驚かすことの夥多しく、或は洋食に限る肉に限るなど云ふ馬鹿者もある樣になつたのは、誠になげかはしい次第である。洋食を食ふなと云ふのではないが、日本の主食を忘れるなと云ふのである。

千三百八十年餘り前、宣化天皇は、始めて米に對しての詔を賜ふて、食者天下之本也、黃金萬貫不ㇾ可ㇾ療ㇾ飢、白玉千箱何能救ㇾ冷とある。先年の米價五拾圓以上、安くなつたと云つても三十圓を下らなかつたが、八兩相場と聞て眼を丸くした時代も夢となつた、而してどれだけ物價があがつたら止むのか今の處まだ見當がつかない。近頃は安くなつたと云ふが此のまゝではない、唯だ此の際理想としては原始時代が思はるゝのである。

嗚呼、成金、嗚呼貧乏、思ひ來れば萬感無量、又た尊きものは宣化帝の御詔勅である。漸次貴族政治に傾きつゝある我政府は國民の苦痛を如何に見てゐたのであるか、米の種類には、大體（うるのこめ）、粳（もちこめ）、糯（たいたうこめ）の三種ある。本草綱目によると、古は糯を

指して稻となしたものであるが、今は粳も糯も稻と稱することになり、其粘るのを糯、粘らざるを粳といつて、共に其種類百程もあると云ふ。而して、天生ニ五穀一所ニ以養ニ人一。得レ之則生、不レ得則死。惟此穀、得ニ天地中和之氣一。同ニ造化生育之功一、故非ニ他物可一比とあるをみても、古來如何に其人世に缺くべからざる物であるかを了知することができる。

籼は俗に大唐米、又は野稻と云ふとある。本草綱目の説明を見ると、籼は似レ粳粒小。始自ニ閩人得ニ種於占城國一。宗眞宗遣レ使。就レ閩、取ニ三萬斛一。分ニ給諸道一爲レ種故今昔有レ之。高仰處俱可レ種とある。和漢三才圖會に、籼本此天竺之種。而宋時始種ニ于中華一。而傳ニ於本朝一。故呼曰大唐米一。今亦西國多種レ之とあるを見れば、現今岡穗と稱するものゝ濫觴であつて、外米輸入の初めでは無かつたか。南京米とは何時の世から云つたものであるか、俗にいふ外米の謂である。

日本紀に、顯宗天皇朝。天下安平。百姓殷富。一斛銀錢一文とあるのは豐年の例

であつて、當時の銀錢一文は銅錢の四文と同じ價であつたらしい。又淸和天皇貞觀八年二月、詔定ニ米穀之價一。京師白米一升直錢四十文、黑米三十文とあるのは凶年の例である。支那は古來斤量を用ひて桝をつかはない。凡そ百斤は四斗に當り、一斛は二百五十斤、我一石位になる。それが銀錢一文であつた。我國に於ても貞觀八年と云ふと、今から千五十年餘前のことである。米一升が三錢か四錢、而も餘り暴騰するからと云つて之を防止する爲に詔によつて其標準を定めてゐる。今も其必要が旱天待雨の感ありだが、政府は何者かに制せられて國民の希望を一向顧慮しない。唐の玄宗開元二十八年冬、米一斛直三錢。絹一匹ノ直亦同。四海充足、無ニ盜賊患一。米一石の價が僅か三錢、絹一匹も三錢ならば他の物價も推して知るべしである。四海充足して盜難反罪等なきは勿論、天下太平であつたに相違ない。嗚呼、我日本の現時に於ける物價と比較して如何の感かある。

過日、義民佐倉宗五郎の芝居を見て感涙にむせんだ。宗五郎が死を屠し一家家族

をすてゝの義擧は誰も知らん者はない、又彼の天命を奉じて天罰を行ふと叫んだ、浪華の俠儒大鹽平八郎が洗心洞の健兒を率ゐて立つたことも皆知つてゐる。今の世は民意を一身に引受け、堂々として人民塗炭の苦境を救ふものが何處にゐるだらうか。噫、嗟、厭になつた。宗五郎も大鹽も歴史の人である、神である。現代の人には似よつた者もない。

まだ、四十年前の世は樂なものであつた。夫婦と兒一人、下婢一人つかつて、年に八拾貳圓あれば充分であつたのである。米一石が三圓で拾錢、拾五錢の釣錢がくる。薪拾貫が貳拾錢、生魚兩手に三ばいが三錢、學生一ケ月の總費が三圓もあれば充分であつた。それでも北陸地方では朝は必ず粥を食つたもので米は大切にした。而して、米一粒粗末にすると、眼がつぶれると云つたものである。明治四五年の頃大藏省が地租改正の實施をやつた時は、米一石の相場凡そ四圓と見積つて、それを全國の標準としたものであつた、それでも思切つた標準だと思つた位である。江戸

時代も、濫りに米を消費せぬと云ふことが行政上の大眼目であつたもので、總て製産と需要との權衡を保つことを土臺にしたことは、幕府始政の當初からの方針であつた。

當年者諸國人民草臥候間、百姓少々可レ令二用捨一、此上若當作も於二損毛一者、來年可レ爲二飢饉一、儉約之儀兼て雖二仰出一、諸士も彌存二其旨一、萬年相愼可レ減二少々一、町人以下者食迄も其覺悟いたし不レ及レ飢樣可二相計一者勿論、百姓等は常に猥りに米不レ給樣に可二申付一事

寛永十九年六月二十九日

德川家光が、寛永十九年の大凶作にあたつて、此の大難を救濟すべく餘儀なく天下の諸侯に發布したる減食令はこれである。次で、翌二十年三月十一日には、士民仕置條例を發布して、飲食の自由を束縛した。總て德川十五代は、古來の政策を踏襲して米價本位を施政方針としたもので、仕置條例の如きは終始一貫したものであ

る。一方米穀の消費を防ぎ、一方増殖を計つた、而して、米の代用食品を奬勵したものである。將軍吉宗の如きは、米價調節を計るべく米相場を開始せしめた、實に崇仰すべきことである。

尙ほ、幕府は凶年に際しては、毎に造酒を半減せしめ、米を原料とせる食品を禁止させた。天明七年の凶作には、江戸町奉行は、朝夕粥を喰ひ、大根、薩摩芋、割麥、小豆、大豆等を雜食せよと布令を出したことがある。

享保十七年大凶作があつたとき、伊豫の松山と云ふ所に、作兵衞と云ふ老年の百姓があつたが、貯への米を喰盡して種麥數俵を殘すのみとなつた。其時、作兵衞は此の老い先少き老人の爲めに、御國の大切な種麥をつぶすには忍びぬと云ふので遂に其種麥を枕に、覺悟の餓死を遂げたと云ふことである。今も義民之墓と題して、田の中に石碑が建つてゐる。嗚呼、作兵衞殿は誠に大和男子だ。今の人に此のまねが出來るか。

近年豐年が打ち續くけれども、人口の增殖と耕地の增加と伴はず、米は段々不足してくる、從て米價は段々騰貴して來る、誠に困つた問題である。日一日に國民の暮らしが困難になつて來ることは明白である。加ふるに此の酉年は凶作である。今の內に何とか安心のできる方法を考へなければならないと思ふと、洵に心細く靑い息が出る。いつも月夜に米の飯と云つた樣なことは今後夢にもあるまい。或は移民或は開墾、或は玄米食、或は主食改良、或は混食など云つて今更の樣に騷いで見た處で一向實行方法が貫徹しなかつた。思ふに寧ろ、百年以前、水野南北翁が著はした減食論でも讀んで、心身の鍛錬でもする樣に奬勵した方が增しであると思ふ。

著者は、數年前から二食主義を實行して居る。朝飯はそつと三椀、晝飯を廢して牛乳一合、夕飯はそつと二椀、それに朝は味噌汁二はいと香物若干、夕は肴、野菜二皿と香物若干のみで、毎日貧乏閑なしに忙はしく働てゐる。自分は二食主義だと云ふと、人は不思議に思つて、而して衞生に良くあるまい、昔から、おまんまは日に

三度ときまつて居る、何も珍奇に二度にしなくても好いではないかと云ふのが普通である。聞けば二食の人もちよい〳〵あるそうである。

自分の考では、人間は健康を保つ爲には、食糧と年齢は大なる關係を有する。幼年から壯年に進むに從て食糧を增し、老年に至るに從て食糧を減ずるのが至當であると思ふ。だから壯年のものには二食にせいとは御勸めしないが、初老前後から以後は三食は反て贅澤であると云ひたいのである。

元來、我國に於ては上古から朝夕二食主義であつたことは、大日本通史を見てもわかる。寧ろ二食主義は大和民族の遺風である。三食になつたのは源平以後戰國時代の樣に思はるゝが、それでも日本風俗史などを見ると鎌倉武士は在國中は朝夕二食であつたと云ふから、出征中は官費の賄で三度給されたのであらう、今でも百姓や骨折業の者は四度も五度も食ふのである。

享保年間、將軍吉宗公は、昔の例を思ふて二食、田舍の節供にも二食の所あり、

僧侶一日一食主義、之を齋（トキ）と云ふ「時」の意なるべし、夕方になつて今一度食ふのは非時と云ふ、是は臨時の意なるべしと云ふ樣なことが書物にある、此れは何も米がなくつて二食にしたのではない。

昔は官吏は扶持と云つて、月給同樣の米を男子一人に付き玄米五合の割で給されたが、女子は三合だ、一日二度で充分なものを、五人扶持も十人扶持も賜はる官吏は米が澤山餘る爲め贅澤に三度食するに至つたのであらう。今の腰辨小吏共、月給は米の代だと云ふことを決して忘れてはならない。

飯と汁木綿着物は身を助く

其餘は我をせむるのみなり　尊德

玄米食が新發見の樣に云つてゐるが、此れとても上古以來二百年前までは、日本人は皆玄米を常食として居つたものである。嘉永五年禁制を出して、玄米早搗藥（尾張美濃國境の山より出る砂）の使用を禁じたと云ふをみると、德川時代から混砂

精米は初まつた樣に思はれる。誠に惡い事が流行り出したもので、此れも贅澤の結果である。昔加賀藩などでは、身分によつて食ふ米の色が幾段にもなつてゐて、普通上白など食ふものだと思つて居なかつた位のものであつたそうだ。伊勢の大廟に御供になる米は、古來今も玄米である。玄米の外部には、人間の榮養上必要缺くべからざるヴヰタミンと云ふ成分が含有されてゐる。此れが精白さるゝと、大切な此の成分が無くなる計りでなく、生活に必要な脂肪、鐵燐、加里、マグネシヤ、那篤倫、石灰等が缺乏するから、主食として甚だ不適當なものになる。況して混砂精白などすると、蛋白質も澱粉も普通白米よりも一層少くなる。約一割は擦落されるだらうと云ふ研究者の報告である、實に馬鹿氣たことを幾百年とやつて來て、今もそれを續けてゐるのである。惡い習慣を作つたものである。

人は聞けば成る程と感心するが、さて實行となると容易に矯めようとはしない。世界の人口十數億、其の半數は米を食するとのことであるが、精白してゐる民族は

日本人ばかりだと云ふ。或は脚氣患者の日本に多いのは此れが爲だと云ふ、兎に角玄米の昔に歸るのが衛生上最も適當な事でもあり、又た是非そうしなくてはならないと思ふ。

天つ日の惠み積み置く無盡藏
鍬で掘り出せ鎌で刈り取れ

尊德

四　酒

酒は最も古い古い歷史を持つたもので、人類の初めからあつたことが想像される。飲酒家の異稱ではない眞實の猩々さへも、酒を造ることを知つてゐる。彼等は樹木の實を嚙んで。岩石のほどよき穴の中に入れ置き、醱酵させて飲むとの事である。酒は最初から嗜好品に相違ないが、百藥の長と云ふことも醫藥に用ひられた事が朧氣ながら合點できる樣に思はれる。我國にも無論神代から酒はあつたもので、日本紀

に、素盞嗚尊は、脚摩乳（アシナヅチ）、手摩乳（テナヅチ）をして八醞酒を造らしめたとある。戰國策に云。儀狄造レ酒進二之於禹一。設文云。少康一名杜康造レ酒。然本草已著二酒名一。素問亦有二酒漿一。則自二黃帝一始矣（和漢三才圖會）等あるをみれば、支那にも太古からあつたものである。

應神天皇の朝に百濟人が來て酒造法を傳へたとあるが、製法が區々であるのを見ると、それは一種の製法で、此の時以前已に日本特有の製法もあつたらしく思はれる。

最近營養問題の研究に有名なる鈴木梅太郎博士はジャガイモから酒を造ることを發明した、尤も極上等の清酒はまだ出來ないが、米から造つたものと區別がつかないと云ふことである。此の釀造法が行はれる事になると年々消費さるゝ約四百萬石の米がたすかつて、食糧問題が大に緩和さるゝ譯で、我輩上戸黨は大に意を强うするに足る。然り而して最大の嗜好品の缺乏しないのは結構だが、玆に注意すべき事は總て一得一失は免かれぬもの、火も水も人間の生活上必要缺くべからさる大切な

ものであるが、一朝火事となり洪水となると誠に有害なものに急轉するが如く、酒も亦た同樣の利害を有するものである。酒は善用すれば百藥の長となり、元氣を養成し、寂寞の伴侶となり、交際を媒介し、人類の嗜好品として、第一位を占むるものである。然しながら之を亂用するに至りては毒藥となり、四百四病を誘發し、喧嘩口論をなさしめ、親交を破り、破鏡を來し、家財を傾け、遊惰にして能力なき國家不生產的の人物を作るもので。慢性酒精中毒患者の如きは、酒氣を帶びざれば馬鹿も同樣である。だから近頃酒と云ふことに就ては大層六ヶ敷議論が起つて、世界的に禁酒と云ふことが始まつたのである、禁酒デー等と云つて今更の樣に宣傳したこともあるが、然し既に佛法では飲酒戒と云つて五戒の內に酒を警め、支那では太古に於て皇帝が酒を斥けてゐる。米國等でも前世紀の頃から禁酒會なるものが出來、又た卒先して禁酒令を發布した。そこで兎角頭痛病みの米、獨、佛等の諸國では商人が種々の藥名をつけて嫌酒藥などを賣り出してゐる。然し山師的のものが多い。日

本にも昔から酒の嫌になる禁厭があるが。あてにならないのは無論である。

我國に於ける禁酒會の眞の起りは、安藤太郎氏の創立したもので、明治十六七年頃、吉植正一郎氏が少壯潑溂たる元氣を以て、各地に幻燈演說を試み、盛に鼓吹したものである。然し、安藤氏は去り、吉植氏は棒を折つた、云はゞ敗軍の將となつたのである。根本正氏の永い間の盡力で今や未成年者は禁酒されたが、酒は相變らず盛に賣れる。一體、藥物、其他の方法等によつて、酒を嫌に成らうと云ふ人の心が解らない。禁酒するなら、斷然禁酒すれば好いではないか。然し總て習慣と云ふものは、忽然禁止することは寧ろ有害の伴ふことを注意しなくてはならない。豪酒家が、絕對禁酒した爲めに、疾病を招き終に死亡した例が夥多ある。だから、禁酒は先づ節酒より初め、酒量三合のものとすれば、二合、一合と云ふ具合に漸次減量して、禁酒に到達すべきである。米國などでは、禁酒令の發布された當時は、香水を盛に飲んだもの、海上に於て飲んだもの、外國に旅行して飲んだもの等もあり、

又に禁酒反對運動も起つた位であつた。上戸に對して御尤のこと御氣の毒千萬であると同情する次等である。一慨に意志の薄弱を以て律すべきものではないと思ふ。

一體酒類は總て「アルコホール」を含むもので、「アルコール」性の飲料を酒となつけたものである、酒類は大體東西通じてみると酒 Sake 葡萄酒 Wein「ビール」Bier 火酒 Brantwei の何れかで、種々數限らなく名稱はあるが、此の四つの內の何れかに屬するものである、「酒」即ち日本酒は酒類中最も純精なもので、他の種類の樣に偏狹でなく、含まるゝものは「デキストリン」、糖分、「グリセリン」酸類の少量で、酒精も十二%位であつて、特異ならざる副成分より成るものと云つてよろしい、藥の樣な臭もない、又た他の酒類の樣に妄りに消化障害を起したり、「フーゼル」油の危險もなくホップの惱みもない。

古來、酒は日常の嗜好品として、東西文野の區別なく愛用せられて來たもので、而も各年代に於て禁酒の聲百毒の長なりと云ふ反對說が繰り返さるゝのであるが、

今も最大なる嗜好品として其の價値を失はないばかりか、藥用にも盛に使はれてゐる。思ふに、折角祖先より傳來し、幾多の改善も行はれたる天の美祿は、適度に之を使用せらるゝなれば、容易に人の氣を和らげ、能く一日の疲勞を醫することが出來るもので、其の效果は到底茶や煙草の及ぶ所ではないのである。酒は米の水、酒さへあれば御飯はいらない、酒飲んで死ぬのは鰌ばかり、下戸は醉醒の水を知るまいとは上戸黨の大氣焰である、神には御酒、佛には般若湯、唐人は天の美祿、又は酒酌、笹の露、憂を拂ふ玉箒など云つてめでたい。書家龜田窮樂が俳人佃房の扇に書きつけた「窮樂好き物」と題されたものがある、烟草、角力、競馬、錢、酒は予が糧なれば數へず。丁度此の條りを書きを書きつゝあつた朝、新聞と共に次の樣な廣告が舞込んでゐた、大聖寺町新橋の伊東酒店、屋號いたやと云ふ酒屋の開業披露廣告である。

酒は百藥の長、苦を忘れ。憂を拂ふ玉箒木、酒なくて何の己れが櫻かな、櫻に遲

し紅葉に早し、秋稍々寒き甘露の味、わけて本場の灘伊丹、酒は砂子の數あれど芳醇無比の生一本、緣喜も嬉し富久娘、佳人の膝に枕して、天の美祿に、醉臥の醒めては握る天下の權、其名譽を菊の花、色香に愛でゝ菊づくし、いたやの店の繁昌を四方の惠に願ぎ奉る（中略）、秋はめで度し御園の薫り、正菊白菊菊酒まで

とりぐ〳〵さまぐ〳〵の亂咲には、心ゆくばかり、篤くと御賞美の程を願上ます。

我大和民族は上古より今日に至るまで盛に酒を使用し來つたもので、特に德川三百年は酒の世の中、其の內最も盛んであつたのは寬永、慶安から元祿の頃で、粹人と云ふよりか寧ろ醉人の橫行した時代である、酒戰會などと云ふものが行はれたのも此の時代である、双方一人づゝ酒飲が座つて、其の眞中に一升二升三升と云ふ大組盃を据置き、さて飲手は互に諸肌をぬき、意氣頗る軒昂、注がれた大盃を交互に飲みつゞけ、相手のどちらかゞ屁古垂れるまで、眞赤になつたり眞青になつたり、眼を白黑して飲む、袴をつけた行司が居て、勝敗を定める。一例を申上ると寬永年

間の頃東の大關の一人であつたのは茨木春朔と云ふ醫者で、飲酒の雅號を地黄坊樽次、西の大關では川崎在平間村の名主であつて、池上四郎右衛門、雅號を大蛇丸底深と云つたのがあつた、茨木の墓は東京小石川戸崎町祥雲寺に今も殘つてゐる、酒德院殿醉翁樽枕居士と云ふのが法號で、延寶八年庚申正月八日と碑面に彫刻してある。辭世が其の左側に彫つてある。

南無三寶あまたの樽を呑みほして
いまあきだるに歸る故郷

數奇の友たる酒の銘は古來種々變遷し、大嘗祭の白酒、黑酒を初めとして數限りなくある。賴山陽の愛用せし伊丹の劍菱は山陽と共に今も人の知る所である、備後鞆の保命酒は今もある、梅酒と云ふのもあつた。

正宗と云ふのは元、人の名であるが、今では酒のことゝ合點する、ビールに正宗と各驛に賣子の呼ぶのは麥酒と酒のことである。

北陸地方で販賣してゐる日本海だけでもなか〳〵多い、下りでは

菊正宗、白鶴（攝津伊丹、灘の嘉納合名會社）白鹿、東自慢（攝津灘の小西新右衛門）櫻正宗（攝津灘の山邑太左衛門）稻正宗（山城伏見）春駒（堺市鳥井本店）いろ盛（攝津灘）東洋一（灘）千歳（堺市）澤龜（堺市宅合名會社）富久娘（伊丹の花木）初戎（攝津灘伴井）

地酒では

正菊、白菊（越前三國）菊酒（越前吉崎）新世界（大聖寺町、渡邊）錦城（大聖寺町、町出）蓬萊（大聖寺町、增田）櫻瓢（大聖寺町、谷藤）

まだ〳〵下りでも地酒でも澤山ある、各地共同樣のことに相違ない、全國の酒のベーバーを集めたら山をなすであらう。猩々は清淨、昔から芽出たいもの、酒屋のベーバーにも看板にもある、祝儀には猩々の小謠が酒の肴になる、豪酒家を猩々と云ふ、日本の偉人豪傑には此の猩々が多かつたのである、荒木又右衛門吉村が櫻

井兄弟の處で飲んだ酒だけでも、たいしたものである。後藤又兵衛基次も斗酒を傾けた、木村重成も戰死を覺悟した時、飯を食せず酒を以て腹を滿たした、岩見重太郎も飲み、大石藏之助、赤垣源藏、堀部安兵衛、榎本其角、英一蝶も飲み、東湖も飲み、山陽も飲み、鵬齋も飲み、高杉晉作も飲んだ、豪酒家は別としても武士たるものは多少なりと酒を飲まなかつたものは無かつた樣である。御賜饌御酒肴料を賜盞など云つて、主君から酒杯を賜はるゝと云ふことは最も名譽なことゝして面目を施したものである、冠婚葬祭、喜怒哀樂何れ酒ならざるはなし、酒なくては其れにならず、又た纏りも付かないのである、新年は屠蘇なくては立たぬ世の中、老若男女誰彼れなく屠蘇一杯を飲まなくては御正月の來た氣分がしないと云ふのは日本民族の習慣である。

松の内は廻禮も萬藏も誰も彼も、いたく醉ふてぞ候ひけるで、白晝蹣跚として大道狹しと濶歩し、右も左もあつたものでないが、何とも云ふ人はなく、生醉本性違

はず、此れでも昔は交通も比較的安全であつたようである。

芭蕉翁が其角に送つた飲酒一枚起請と云ふのがある、其の文に

もろこし我朝にもろ〳〵の上戸達の沙汰し申さるゝさかもりにあらず、又かちんをくひ茶をのみ、このめる酒にもあらず、只往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申て、うたがひなく往生するぞと思ひとりて一杯のむより外、別の子細は候はず、但三献四種の肴など申ことの候は、酒宴も決定してめづらしき酒肴もとめたると思ふうちにこもり候也、此外に奥ふかき大盃は二尊の御あはれみにはづれ本性を失ひ候、くこんを愛せん人は、たとひ一代の法を學ばずとも、一文不智愚鈍の身になして、下戸にも常にふるまはせて、只一向に酒をのむべし

右飲酒一枚起請は

尊朝親王御作のよし承候、尤さる人の許に御直筆にてかけ物にして床にかゝり有之候、あまり〳〵面白き御作ゆゑ寫し來候、貴丈常々大酒をせられ候故、此

文句を寫して大酒は御無用に存候、仍而一句

朝顔に我は飯喰ふ男かな

いかゞ、くはしき事は頓て御目にかゝり萬々可申述候、以上

其角は大酒家であつたに相違ない、而して失敗もあつたに相違なからう、さすがに翁は親切なものである、禁酒せよとは云はない節酒せよと勸告したのである。

一體酒は人間の壽命とは關係がない、唯だ癌腫などの素因のあるものは其の發生を速ならしむるかも知らんが、さもなくば酒は全く天の美祿である、外科醫者のポリチマンと云ふ人は二十五年以來毎晩酒を飲んで健康を害さなかつた。カザリナ、レイモンと云ふ婦人は大酒家であつたが、百四歳まで長生した、佛國の一地方シャイリと云ふ村は丁度日本の樣に酒飲みの盛んな所で、千八百九十七年の調に、五百二十三人の住民中八十歳の高齡者が二十人以上もあつたと云ふことである。

百十九歳で遷化した伊勢長命寺の禪修法印は極めて質朴寡慾な人で、物に拘はらず、唯だ酒を嗜み豆腐を好んだと云ふことである（日本及日本人新井誠夫氏）。今日も某家の結婚御部屋見舞に往つた妻の談に、八十歳の老婆酒も飲み俗謠も壯者を凌ぐ位であつたと云ふ、僕の知つた人で大聖寺町だけでも此樣な人が女で三人男で一人、四人もゐる、而して盛に飲む處である、僕も大聖寺に來てから盛んに飲んだ、而して終に大正九年十一月一日大負傷をして今も立派に坐ることができない。當時

豪杯酩酊陷深慾。爾後先生不用缸。恨是年々酒價下。愛瓢空掛竹菴窓。

愚吟に對し

御餘韻に和して

君ひとり花に酒なき恨みかな　　松宇

歩貴韻得一絶　　本多呑天

陷寧幸非人道慾。先生再起亦此缸。情寄病菴翠山下。空令王猴老巖窓、

人酒を飲み、酒酒を飲み、酒人を飲む、僕は確に酒に飲まれたのである、酒は飲むべし飲まるべからず、僕は確に飲まれるのである。

大伴卿

酒の名をひじりとおほせし古へのおほきひじりの言のよろしさ
いにしへのなゝのかしこき人達も、はりする物は酒にし有けり
いはんすべせんすべ知らに極めたるとほとき物は酒にし有らじ
なか〳〵に人とあらずは酒つぼに成にてしかもさけにしみなん
夜光るたまといふとも酒飲んでこゝろをやるにあにまさらめや

五　餅

事物紀原に、餅は七國の時に起ると云つてある。或は餅と云ふのは俗で、餈と書くんだと云ふことである。玄猪餅の由來に、伊勢の土民に門太夫と云ふものがあつて、毎年玄猪餅を禁中に獻じたと云ふことが延喜式にある。東照神君以來、武家特祝レ之。其餅大可ニ酒杯一。白赤二、添ニ長蚫昆布一。以賜ニ諸士一と云ふ記載などがあるを見れば、我國にも古から餅はあつたものと思はるゝ。又た、垂仁天皇の朝に於ても、巳月上巳、亥月端亥に五色餅並に五色弊及び酒菓等を以て御祭をなし、國福を祈つたと云ふことがある。和漢三才圖會に

餅有ニ數種一。粟餅、黍餅、蜀黍餅等。雜穀與レ糯、合併。蒸而擣者也。或、包ニ肉於中一、蒸レ之。此名レ餡。今唯以ニ赤小豆一、煮熟擂レ之。去レ皮、和ニ沙糖一者曰レ餡

とあるをみると、餡入の餅も昔からあつたものである。大福餅と云ふのは、明和八年、小石川におたまと云ふ貧乏な後家婆さんが居つて、白い餅の中に餡の代りに鹽を入れて、やすく賣つたのが始りであつたと云ふが、後には腹太餅など云つて砂糖入のもあつた。夜見世で無籠生活の徒を顧客として、温めて賣つたのは寛政の頃からであると思ふ。

天子御齒固餐也。通俗鏡餐也。雑煮茨餐也。上巳蓬餐也。十月玄猪餐也。凡祭禮婚儀及一切嘉祝皆擣レ餐贈ニ答之。

我國では餅は總て目出度い時に搗いたもので、今でも左うである。黄餅を搗くことを餅擣と云つたものである。關東東北地方などに於ては、目出度い時は無論の事、珍客があつても餅を搗いて御馳走をする。而して、雑煮、餡ころ、からみもち、納豆餅、汁粉餅など種々のものが出來る。然し一般に餅搗（餅春）と云ふのは、昔から年の暮に新年の用に餅を搗くのが我國の例である。都市では、傭はれて餅搗をする人夫が晝夜となく臼と杵を持つて高聲に餅擣うと呼で街衢を巡つたものだと云ふことである。而して、晝は乞食の來る（江戸では非人共が餅春の祝と云つて切餅の幾片かを貰つて廻る、そして呉れた家には其の家の門口の柱の根の方に印札を張つたもので、之を餅の札と云つた）を嫌つて、多くは夜間に春いたと云ふ。貰餅と云ふのも同じ事である。大聖寺などでは今も貰餅がある。

月代や三十日に近き餅の音　桃青

玄猪餅も昔内藏寮が餅を進めたもので、大豆、小豆、大角豆、胡麻、栗、柿、糖の七種の粉を以て製したと云ふことである。

牡丹餅は、普通の餅ではない。粳と糯とをまぜた飯を雷盆でこねて、其れを手で圓くし、或は炒豆粉に糝して黄色にし、或は赤小豆餡を糝して紫色にしたものである。別に萩の花（おはぎ）とも呼ぶのは、形や色から出た名稱であるとも云ひ、又作る時の季節に因るとも云ふ。又た着くことを知らずと云ふ心から、夜舟または主之連歌など呼ぶこともある。やはり贈答にする習慣があるが、私は此の古例をすてずに、盛に氏神を祭り、盛に法要を營み、而して、餅も搗き、牡丹餅も作つて、互に贈答もするの風俗を何處までも殘して置きたい、それが先祖の遺風を忘れない美風であつて、惡い習慣ではないと思ふ。

六　味　噌

味噌は、今こそ醤油と製造原料を異にするが、昔し醤油のモロミを未だ搾らない者を未醤と云つたもので、汁にしたり、煮物に使つたり、酢味噌や、鰻に使ふ調味料である、元支那から來たものである。順倭名抄云。

俗用味噌二字。味宜作未。何則通俗文有末榆莢醬。末搗末之義也。而末訛爲未。未轉爲味。又有志賀未醬、飛彈未醬。各以其所爲名也。

と云ふのを見れば、味噌と書くのは俗字であつたらしい。渡來した年代は、諸説あつて確な所はわからないが、一千二百年餘り前、奈良朝の時代に日本に歸化した支那の僧侶で、鑑眞と云ふものが製法を傳へたと云ふことである。兎に角我國に於ても古くから味噌を用ひたことは確かである。

然し、我國の味噌の製法は、餘程進歩したもので、米麹を加ふるに至つたのも可

ない昔からである。和漢三才圖會などにも、豆汁不多不少也。舂之加麹一斗五升、鹽二升半。麹多入則味美とあるをみれば、現今の製法と同じものである。三州岡崎の八丁味噌などは、其製法を得た有名なものであるが、要するに大豆と鹽と水と麹の割合で優劣ができる。而して鹽の辛い味噌は麥麹を用ひるのである。今は各地共大方八丁味噌の製法である。大昔は、粉味噌、或は玉味噌と云つた樣な製法であつた。

造法不一。用蠶豆煮去皮。和鹽麹。擣之爲團丸。裹苞掛干烟上。則耐久不餒。用時取出。以雷盆碾末也。無濕潤。知水爲汁。味不佳。俗名玉未醬。一名粉未醬此古之製。而今赤和州賤民所用也。

と云ふを見ても、古は幼稚なものであつた事がわかる。私は、日露戰役の時、滿州に於て滿州人の味噌を作るのを研究してみた、彼等は大豆を煮て、それを人頭大又はより大なる團子に作つて、天上に置て乾燥させて置く、而して、味噌を作るとき

は、夏季それを取り出して細かく崩し、古代の大甕に入れて、水と混合する。中には蟲だらけのもある。別に稍々小き甕に山鹽を溶して置て、毎日少しづゝ其鹽水を豆汁に加へて行く、而して天日にあぶつては搔き廻し、鹽水を加へては搔き廻して醱酵させる。斯くて時日を經るに從て非常に鹽鹹い、惡臭ある味噌が出來上るのである。だから味噌甕は何時も戸外の日あたりよき所にアンペラの天蓋をかぶせて置てある。味は日本の味噌以上に甘いが、臭氣の甚しいので我々は食ふ氣になれなかつた。滿州人は此の味噌を大切にして、僅かづゝ使用する。味噌の中には茄子瓜などを入れて味噌漬にしてある。此所らは日本と同じ事である。竺庵と云ふ支那から歸化した僧侶の話に、支那にゐた頃は絶えず人蔘を藥用としたが、日本へ來てからは味噌汁があるので人蔘を廢しても丈夫であると云つたそうだが、信用の出來ぬことである。或は竺庵め味噌をすつて人蔘の喇叭を吹いたではないとか疑はれる。

關東北國の家庭では、朝食には味噌汁があるにきまつてゐる。味噌汁を食はない

と氣がすまない特に烟草飲みは味噌でなくては咽の脂が下らないと云つてゐる。從て東京などでは、味噌の需用が多い爲めか、味噌屋では一夜味噌と云つて、一晝夜位で出來るものがある。滋養分はどうか知らないが、實際甘くない。味噌ばかりは田舍の味噌に限る。地方の富豪家などでは、三年味噌、五年味噌と云つて、古いのを尙とんでゐる。全く三年味噌位の所が美味いようである。

味噌の種類に昔から知られたものは、白味噌、麥味噌、經山寺味噌、ひしほ、糠味噌等であつて、其他小金味噌、鰤味噌、鯛味噌、すつぽん味噌、馬鈴薯味噌、どうこみそ、等百種もまつともある、即製のものでは柚味噌、胡麻味噌など何でも香味を配合して賞味する習慣がある。

元は兎に角、今では味噌は日本のものである。日本人と味噌とは離れることのできない食物である。而して、日本人の健康は味噌の御蔭であると云つてもよい。同じ日本人同士でも、味噌を常食としてゐる人は血色からして健康に見える味噌の滋

養分を調べた人があつたが、其れを見ると全く效能があると云ふ事が判かる。

壯年者は牛乳など飲まんでも、味噌汁をすゝつて折角働くのだ、寒くもなければ暑くもない。味噌の中には、蛋白質もあれば、窒素もある、糖分もあれば、脂肪もある。少量のアルコール分も含んでゐる。めつた汁も納豆汁も、味噌で作ると此の上ない、ほつぺたが隱居するよ。賤民の用ゆる所などゝ云つたのは理の解らない時代のことである。味噌に就ては面白い談しがある。

「唐人奴烟草を日本に輸入させて、日本人を、みなごろしにしようとしたのだが、日本には味噌と云ふものがあつて、煙草のやにを下すから一人も烟草で死んだものはない。煙管の掃除も味噌汁に限る」

と云ふ。考ふるに、烟草は人體を羸瘦させるもの、味噌は反對に肥滿させるものである。誠に其の「コントラスト」が面白い。要するに味噌の効能を誇大に云つた者だらうが、一面深き意味があると思ふ。

七　家

天地の神代はしらす橿原の宮居ぞ國の始なりける　　定　家

和漢三才圖會に上古。穴居而野處。後世。聖人易レ之以二宮室一上レ棟下レ宇以待二風雨一。取二之雷天大壯卦一。黄帝始作二宮室一蓋古者。貴賤所レ居皆稱レ宮。至レ秦、乃定爲二至尊所居之稱一とある、上古我國に居つた夷族で、貝塚、土蜘蛛、あいぬ等云つた土人は、岩窟土室などに住居して居つたもので、今でも各地に其跡が殘つて居る。

定家卿の歌から思ひつくのであるが、日本は元々八百萬神々と云つて、其の神々の子孫、即ち人間神主義である。廣大無邊なる天御中主神から初まり、天神五柱と稱し、それから國常立神となつてより、天神七代、天照大神となつてから地神五代である。上古天地の神代の事は、著者も詳細は知らない。次で天下を平定し、橿原の宮に御即位になつたのが、人皇第一代神武天皇で、天照大神を鳥見山に祭られた。

之が祖先崇拜國民道德の總ての淵源をなしてるのである。

高天原から秋津洲へ御降りになつた天の神々に就ては、人類學者には種々の說があるが、著者が考では天神時代から地神の初め頃までは、大和民族も所謂原始日本人で、石器時代であつたものゝ樣に思はれる。從て大方は家らしい家もなかつたと想像される。鐵器なども地神時代に至つて發明したらしく。それに就ては吉田文俊氏の說に贊成するものである。而して、日本の文化は總て日本海に面した方面即ち裏日本からであることも信ぜらるゝ。吾々の祖先たる神々は、山陰地方は出雲を中心として天降つたらしく、當時、あいぬ人種は吾々の祖先より後れて東北日本海沿岸を沿ふて漸次北陸に侵入し來つたに對し、追々大和民族の勢力を扶殖して居た樣に考へらるゝのである。從て、器物、家屋等總ての進步は他の民族からの影響からでなく、三韓交通の前までは、自然に發達して來たものと思はれる。

近頃加賀國江沼郡勅使村に發見された寶山の穴も當時に於ける發達せる穴居の遺

蹟で、而して古墳ではなかろうかと思ふ。

されば、吾々の祖先は立派に瑞穗國となつてからでも、家らしい家は出來なかつた。皇祖天照大神が御田を御作りになつた頃も穴居が主で、唯だ草葺の四本丸太で四面莚樣のものを張り回し、壁もなければ緣も土臺もない、頗る質素な唯だ雨露を凌ぐと云ふに止つたもので、從て、貴賤上下の差別なども殆んどなかつた。

岩をほつて住み、流れをながしとなし、川を厠となせし時代は略するが、兎に角宮は御屋であつて、我國に於ては、神武天皇和州橿原宮が其始である。其後千二百五十年餘、三韓との交通もあつたが、此れと云ふ著しい變化はなかつた。然るに推古天皇の七年即ち我國紀元千二百五十七年前後に至つて、家屋其他百般の事業に至るまで著大の進步をなした。丁度明治前後から歐米の文物を輸入して急速の進步をしたと同樣に、聖德太子の叡明仁恕なる攝政は、政式を立て、冠階を定め、佛法を

弘め、舞樂を作り、建築諸工を起し、臣下を隋唐に遣はし、盛に其文物を輸入し、本朝舊事本紀を著すなど、一は以て國是を明にし、一は以て文物の進運を計り、文明の大勢に順應同化せしめんと鋭意努められたものである。

されば、太子は百工の師祖とあがめられ、其忌日には僧侶共は肉食を禁じ、潔齋精進し、尊崇する所以である。推古天皇七年。聖德太子奏曰、歷代禁造。或大或小未曾格理。自今以定。美疎者依時。必不可大也。方面三百六十五步二十八殿並立。第二十五之一殿是爲祭神齋殿。以他二十七殿、爲天皇所領殿。宜檜材造檜皮葺矣。南面大殿移日小宮。以柱支乎棟、而梁裏天井、則攝乃機之殿也。是時以此法、造小墾田宮。と云ふことがある。是れぞ、宮城大內裏の始めと見て差支ない。然し、瓦は前代崇峻天皇の時に肇まつたことが、日本紀に云つてある。

崇峻天皇の元年、百濟國から瓦博士と云ふのが六人程渡來したのが始である。攝州大坂の瓦は、聖德太子が守屋連を誅した後、天王寺處々の伽藍を造るために、木工

瓦工を百濟國から召されたのから傳はると云ふことである。

大なる衣服は家屋で、小なる家屋は衣服である。而して見たら家も身分相應寒暑をしのぎ得たら、それで好からうと思ふ。乃木閣下と其の家などは我々の學ぶべき御手本ではないか。

又た曰く、家は國家の縮圖にして、國家は家の擴大なり、どこまでも日本的なるを欲する。

現今、日本の家屋は、各國ぶちまぜ、變な間子然たるものである。西洋造りだが日本造りだか解らないのが多い、人間で云つたら、混血兒だなんと云つて餘り好い氣持はしないだらう。日本一の西洋造りと云つた所で、亞米利加あたりの世界一と比較したなら、そばへも寄り付かれる者ではない。それよりか、やはり奈良京都のあたりにある。昔の建物は誠にけつこうだ、此れは西洋にもなからう。日本の誇りである。一々例を引て、時代的に說明したいが、此處には略する。

日本人の多くは、折角我々民族の祖先が骨を折つて建てた家を見ても、何の氣なしに唯だ立派だな位である。反て外人の中には、日本古代の建物に就て明細に研究してゐる人がある。誠に御恥しい話だ。なんぼ樂天主義、英雄主義でも、先祖の事は知らなくてはならない。それが又た、日本國民の本性でなくてはならないと思ふ西洋をまねて反て彼等の嘲笑となり、家も國家も變造さるゝに至つては、我々大和民族の誠に忍ぶべからざることである。

一體日本の住宅は日本民族の國風にある諸種の目的と、趣味或は美術的感念によつて種々に變遷し發達し來つたものである。近くは、衞生的方面からも改良せられ或は歐化し、さては住宅改良問題となり、世論を高めつゝあるのである。

元來今迄の日本の家は御承知の通り、戸障子と疊を嵌め込んだもので、生活狀態から自然に變化し來つたものである。起居の風習上から、先づ注目すべきものは坐り方である。亞細亞諸民族には安座をかいて居る國はあるが、我々日本人の樣な膝

を曲げて踵に臀を載せる坐り方をしてゐる國はない、全く日本特有である。然し此の風習は古はなかつたもので、千二三百年前の彫刻や繪畫を見ても今の坐り方はない。尙ほ、奈良朝時代は、椅子を輸入した位である。又た藤原時代は、椅子が廢つたことがあるが、それでも今の坐り方と違ふ。鎌倉時代になつてから坐法も區々になつて、現今の樣な坐り方も始まつた樣である。然し當時は、まだ一般ではなかつた。最も盛に行はるゝに至つた至つたのは、今から二三百年前德川時代で、一の作法といつたので、多分佛敎から跪坐が轉じて茶席の作法として定められた結果であらう、即ち、元祿前後茶道隆盛の遺風であると思はるゝのである、今日では儀式の坐て安座をかいて無禮視されないのに雅樂の伶人のみであるが、是は古樂の技師が三韓から來た人で、其の風に倣つた風習であらう、又連歌俳諧の儀式に文臺に坐る人に限つて左の膝を立膝をするのを禮とするのは除外例であるが、是は百人一首の繪にもある當時の風習を模するのである、其の外は相撲取ても洋服股引等の人でも、し

びれを切らし乍ら畏まつて坐らなければならぬのが今日の禮式である、著者が考では此樣な不衞生な風習は住宅の改良と共に徹廢して、古の風習に復したらどうだ。

何も西洋を眞似ねなくとも日本には椅子もあれば、床机もあり、家も洋館よりも餘程美術的で、而して立派である。衞生的なのは此の上もない。古代日本には肺結核もなく、一般內科病も甚だ少かつたのである。而して今の人よりは、身長もずつと高く、元氣もあつた事は確かである。

八　風　呂

風呂は、浴室の湯艙である。普通風呂と云ふのは、浴場を意味する。我國に於ては、上古神代から入浴をしたもので、身體を淸めると共に心をも淸めたものである單に、一日の疲勞を慰すると云ふ爲めではなかつた。されば、齋戒沐浴と云つたのは、誰も知る所である。大和民族は、產れた時の產湯と死んで行く時の湯灌は必ず

する。武士は戰死を覺悟し或は死を決した場合に、沐浴して身を淸め、兜に名香を焚いて出陣したと云ふことである。

日本人は、世界中最も湯浴を好む國民で、貴賤上下の差別なく、一日も風呂がなくては立たない。勞働黨は、尙ほ更である。明治三十七八年日露戰役の時、著者は近衞步兵第三聯隊の小隊長をつとめて滿洲の野に轉戰したが、出征諸隊は誰傳ふるとなく一齊に甕風呂と云ふのを發明して入浴したのである。つまり据風呂の一種である。甕風呂は支那民家の味噌瓶を浴艙に仕、据風呂も高麗陣から始まつたと古書にある。立て、炭燒竈の小な樣な穴を土地に作り、其の上に甕を半分以上落し、竈口から火を焚て湯を沸かしたのである。急ぎの場合は浴室は作らなかつたが、少し長く滯在するときは、分捕つた露兵の天幕や高粱の殼で周圍をかこつて風呂場を作つたものである。初めは味噌くさかつたが、慣れると氣持の好いものである。一地に永く滯在すると、支那民家及び其周圍の大掃除をして、便所風呂場は眞先に造つた。支那民

家と云つたら其れは不潔なもので、室内は一種云はれぬ悪臭がして、南京蟲が夥しくゐる。家屋の周圍は、人糞、馬糞、家畜の糞だらけ、うつかり歩けない。而して便所と云ふものはない。

或時支那の女が婦人房の裏畑で生つたまゝの胡瓜をばくつきつゝ脱糞してゐるのを見たことがある。何たるざまだらう。日本では到底見られない圖である。少し教育もありそうな支那人に糞便亂發の不潔、無便所の不可を說いたことがある。所が支那人の言ひ草が面白い『一個所に蓄便するのは驢馬の樣なものだ、彼方此方に脱糞して置けば雨毎に流されて反て清潔である』萬事が此樣な考の國民だから、支那は眠つてゐるのだ。

支那人は入浴嫌いで、滿州の都市を見ても澡堂(湯屋)は甚だ少い。田舍などでは彼等が湯浴したのを見たことがなかつた。支那人は一生三浴といふが、縱し、それが多少誇張としても、彼等の湯浴嫌は確である。

我が國の祖先の教へは、總てのものを祓ひ清めよと云ふので、己の一身は勿論、周圍も、衣食住も、天地萬物一切を祓ひ清めて、悉く清淨となし、清淨の天地に清淨な身を置くことである。沐浴は身を清淨にすることの一つであると思ふ。然るに後世風呂屋は最下等のものとなつて、或は表看板は風呂屋でも、二階に賣春婦を置て盛に亂行をさせた時代もある。元祿十五年淺野家の浪人小山田庄左衞門と云ふ馬鹿者は、義士の仲間に加名しながら、極月十四日吉良邸へ乘り込まうと云ふ其夜、品川で丁香湯に身を清めて討入しようと看板に惚れて、這入つたのが身の誤り、それが曖昧屋であつて、大石殿から戒禁されてゐた酒を、女の口事にのつて一口飲んだ所から、一杯一杯、又た一杯、終に亡君の敵討に間に合はなかつた。それが爲めに父親は申譯なしとて切腹し、自分は後に詰らない死樣をしたのである。忠臣となるべき彼は、酒と女の爲めに大不忠大不孝の痴者となつたのである。

文政時代には据風呂に入りながら、幇間にかつがせて、隅田堤の花見をして、湯

の瘟氣にうたれて死んだ馬鹿者もある。

大阪城の一日、茶坊主が、私情から木村長門守を浴室に暗殺しようとして、誤つて薄田隼人に試みた。隼人憤るまいことか、榮螺の様な拳骨を振り上げ一撲ちに茶坊主を殺さうとした。其の瞬間後から誰か拳を支へたと思ふと寸分動かない。振り返つてみると長門守である。大力無双の隼人の拳を動かさなかつた長門守の力は、更に驚嘆すべきものである。「此の茶坊主め、貴殿を殺さうと謀りて余を誤つたので憎ッくき奴、今一撲りに殺してやらうとしたのだ、何で御止めになるか」「そは何かの誤りにてありなん、余に任かされよ」長門守は驚く茶坊主の帶を小指の尖に引きかけ、宙に釣りて我室に持ち込み、さて懇々と説諭し、大阪城の雲行を説き聞かした。茶坊主は恥ぢ且つ感極まつて即坐に長門守と主従の約束をした。後日大阪落城の時、此の茶坊主は、長門守と共に討死したと云ふ。此の些事を見ても長門守の大丈夫たる度量は、發揮されてゐる。

重成討死を覺悟するや、沐浴して身を清め、兜に名香をたいて出陣したと云ふことである。老獪家康も重成には心から惚れ込んだもので、重成の首をみて暗涙を催し、冑を指して志あるものは出てゝ冑を戴けと云つた位、感嘆惜く能はざりしと云ふ木村梅のはなしは此れから出たのである。渡邊霞亭氏の「木村長門守」には風呂場はない、然し彼れの忠節、彼れの風流、彼れは長へに史上の花であると結んでゐるは嬉しい。

江戸の大俠裏花川戸の幡隨院長兵衛は、或夏、裏三番町の旗本水野十郎左衛門の屋敷で、一風呂這入つたのが身の禍となり、「向ふ通るは長兵衛じやないか……お茶まゐれ、新茶をまいれ……」と江戸の市民に敬愛され、遊俠の翹楚であり、豪膽であつた長兵衛も、浴槽に身を湛えながら、蜈蚣槍と云ふ大槍の錆となつて、死屍は酒菰に包んで取捨てられた。實に殘念なことをしたものである。傑人の最後としては、實に情ない。長兵衛の慘殺されたに就ては、種々の説があるが、一として全く

の事實と思はるゝものがない。と云ふのは、大久保彦左衞門の旗本政策から、天下の旗本を横暴ならしめたことゝ、長兵衞が江戸市民の意志を代表し、俠義旺溢、何等の遠慮もなく、之に對抗したと云ふことが潜伏せる原因であつたに相違ないことは、想像し得るのである。謂はゞ官俠と民俠との衝突である。大俠長兵衞が慘殺されて以來、吉原堤の暗討等の復讎もあつたが、其風を聞いて起つものなく、江戸の遊俠は是より豹變したと云ふことである。前車の覆るは後車の戒とでも云ふのであらうが、是では餘りに勇氣がなさ過ぎる。其後官俠水野は積惡のむくひにより、切腹仰付けられたは當然である。

個人主義が發達すればする程、義民とか義俠とか云ふことは人の頭から忘れられて、人の爲めに働き人の爲めに憐れを見ると云ふものが無くなる道理である。斯くて富豪は下層民を動物視し、貧民は資本家を敵視し、さては露國民的精神を以て國民の志想を支配するに至るのである。先頃勞働中尉庄司俊夫君と云ふ快男子があたが

警察官との衝突を演說してゐる位では一向たよりにならない。

或浮世繪にこんなことが書てあつた

湯之盤銘曰、

苟日新日日新又日新

あら玉の年のはじめの糠袋

心の垢を洗ひ落として

斯うした心もちで日々の湯に入つたなら、誠に清淨な身である。實際入浴した後の心もちはまた格別で、何んとなく氣も心もゆつたりとするものである。此の時の精神で物事にあたつたなら、失敗もない事と思ふ。光明皇后は、千人の垢を洗ふたとあるが、大なる功德、大慈の國母であり、又た傑出したる大和婦人の美の典型である。

第三編

一　鮨

今から千餘年前即ち延喜年間の記錄に、「はや鮨」と云ふものがある。此の鮨は、鯛及び貝類又は鹿肉で拵へたもので、飯を用ひたのでは無かつた樣である。鮓の始りは鶚と云ふ鳥が魚を捕つて海岸の巖の凹みに入れて置くと自然に潮水で醱酵して美味くなるのを、人間が盗んで食つて見て、之に倣つて作つたと云ふ説がある、其の醱酵を早くする爲に肉の間に温い飯を挿んで押し石を加へて漬けるので、自然に酸味を生じるのを期として出して食ふのである、故に此の飯は醱酵の材料であつて食ふ爲ではないが、酸味の生じない前に食ふと即ち早鮓である、然るに千五百餘年前、唐の安祿山が、時の帝より玄猪鮨を賜はつたと云ふことが山堂肆考に記載されて

居るのを見ると、日本の鮨も元は支那から習つたものだらう。

其後、此の飯なしの鮨は、足利の末頃まで傳へられた樣である。今も江州の鮒鮓などは飯なしである。飯を添へて食ふ爲に作つたのは、飯ずしと云つて慶長年間即ち三百年餘り前から出來たものである。即ち現今の如き飯の鮨は此の時代が起源である、だから傳來當時の鮨とは全く別種と見てもよいと思ふ。夫から、慶長のごたくさが濟んで、德川の代となつてから。貞享年間に、江戸に鮨屋が出來た。江戸鹿子と云ふ本は、貞享四年に刊行されたものであるが、四ッ谷舟町横町近江屋、駿河屋の二軒の鮨屋を記載してある。それから三十年程後正德二年に、刊行された和漢三才圖會には、魚部の終り魚之用の所に鮓の說明がしてある。江州鮒、濃州鱒、和州吉野鱒名釣瓶鮓 城州宇治鰻鱺名宇治丸 攝州福島小鰡名雀鮓和州今井鯖、皆得レ名者也、とあるを見ても、各所に鮓が流行したものである。今でも江州の鮒鮓は腹藥だと云つて珍重がられてゐる。

その頃の鮓は、釀レ鮓法。鹽少糝壓レ之。一夜二拭淨水氣一。用二冷飯一藏二于桶一。如二糟漬法一。而春冬四五日。夏秋一二日熟とあつて、當座漬を賣るのは稀であつた。鮓賣は丸い桶の薄いのに、古傘の紙を蓋にし、幾つも重ねて、數日漬込んで置いたものを、鯛の鮨、鯵の鮨と言つて賣りあるいたものである。五元集に其角が永代橋の茶店に雨宿りした時の句に

明石より雷晴れて鮓の蓋

當時、鮓桶の蓋に明石傘の紙を用ゐたものである。當時贅澤鮨と云ふのが兩國橋の袂にあつて、當座漬を專門にしたもので、客の前で茹で玉子の黃味を去つて飯を入れて出し、海鰻の煮立の暖い所を漬けて侑めると云つた樣なやり方で非常に流行したものである。それから、寶曆年間に「おまんがすし」と云ふ奇拔な鮨屋が京橋中橋邊に開店されたとある。斯くて鮨は江戸の名物となつたのである。

握鮓の始まつたのは、まだ百年にならない。文政七年のことである。江戸兩國で

與兵衛鮨の先祖、華屋與兵衛と云ふ人が元祖である。與兵衛は、初め坂倉屋と云ふ札差業の手代をして居つたのであるが、御暇して道具商となり、菓子賣となり、失敗に失敗を重ね、殘つたものは借金ばかりとなり、その揚げく性來の茶癖と藏前風の好事心から案じ出したのが、握鮨即ち鮨の早漬新法である。當時、花の御江戸は贅澤の都であつた丈に、食道樂も殆んど其頂天に達した。山谷の八百善、深川の平清、葛西太郎、百川等云ふ江戸に名代の料理店も、此の時に相前後して起つたものである。蜀山人の狂歌に

今の世に書は鵬齋に狂歌をれ藝者おまんに料理八百善

尙ほ、江戸ッ子の食品に對する嗜好は、菓子、蕎麥、天麩羅、其他有らゆる食物に至るまで新奇を求め、珍趣を爭ふて、所謂オツな物を試みたものである。與兵衛鮨、松の鮨などは今も其聲名を傳へて居る通り、創始時代は江戸人士の大歡迎を受けたものである、北陸地方は今でも保守主義で、押鮨ばかり、握鮨を出す料理屋は

甚だ稀である、よし出しても甚だまづい、鮨は東京に限る。

稻荷鮨は、七十年餘り前、即ち天保の末年頃に、兩國橋の附近で創めて販賣し出したもので、何でもオツな物と云ふのは、皆深川、本所あたりの下町から創まつたものである。尤も四谷、麴町、赤坂など云ふ所は大小名の邸宅ばかり、江戸の繁華は寧ろ下町にあつたものである。

三才圖會に柿鮓と云ふものを記載してある。それは、鯛、鰮、鮑、章魚、烏賊、鮒等を牒で、それに紫蘇、筍、木耳をまぜて之を釀つたもので、最も上品なものだと註してある。

鮓の石に五更の鐘の響き哉　蕪村
鮓つけて誰まつとしもなき身かな　同
鮒鮓や彦根の城に雲かゝる　同
夢さめてあはやと開く一夜鮓　同

鮓桶を洗へば淺き游魚かな　蕪村

早鮓の蓋とるまでの唱和かな　太祇

彌助鮓語れば長しさる程に　沙羅

彌助鮓と云ふのは、大和の下市の釣瓶鮨の事で何も別製のものがあるわけでない。其の彌助と云ふのは、義太夫千本櫻鮓屋の段で、お里の戀男彌助さん、實は三位中將維盛さまと云ふのから轉じ出した名稱である。今では花柳界で鮨の事を異名を彌助と呼んで居る。

天保の儉約令當時のことである。江戸の名物野臺見世の鮨屋二百餘人が、高價の鮨を賣つたと云ふかどで捕へられ、手鎖の刑に處せられたと云ふことがある。安りに暴利を貪つた奸商の懲戒である。大正の今日、鮓などに餘り重きを置てない樣であるが、考へてみると、米は段々高くなつてきて安いと云つても三十圓、國民の生活困難は日々御同樣に、我々の身邊に迫りつゝあるのである。而して、成金、奸商

天下に跋扈し、人情は次第に輕薄となり、仁者、義人、若しくは正直者は反て馬鹿者の中間と見なさるゝ樣になつた。さぞかし聖人君子は地下に泣いてゐるだらう。こんな具合だから、今では天保の鮨屋以上のぶつたぐり主義の鮨屋でも、手鎖の刑に處せらるゝ事はない。だから、今ではうつかり鮓の立喰もできない、下手をまごつくと、帽子や羽織をあづけて歸らなくてはならない羽目になる

二　蕎麥

信州信濃の新蕎麥よりもわたしやお前のそばがよい

往時、追分邊から唄ふたものではなからうか、長野は善光寺と共に蕎麥の名物、それから北柏原、田口邊までも蕎麥粉が產物である、和漢三才圖會に、信州之產爲上。遠州、三州、薩州及上野、下野亞之良とあるを見れば、信州の蕎麥は昔も今も名高いものである。

抑も蕎麥切、略してソバと呼ぶものは、蕎麥麪で作つた物で、其製法は古來何の變化もなく、一筋道を來つたものである。圖會に、用蕎麥麪作餅。以棒拗之。或卷或擴。令如革。卷疊之細切。投沸湯、略煮之。洗淨、以醤油汁食之とあるが、今も其の通りである。

始めて製出されたのは、寛文四年即ち二百五十六年前のことで、寛永十九年の大凶作から二十年目である。嘗て、甲斐の天目山に參詣人が多かつた時、米麥がなくなつて蕎麥麪を煉つて代用したことがある。即ち今も田舍に傳はる蕎麥粥（河漏）を工夫した。それから、饂飩の製法を學んで蕎麥切を發明したのが寛文年間で、或は甲斐から傳へられたものであると、或る書物に記載されてある、米飯の代用品として調寶なもので、移轉や煤掃で飯を炊く暇の無い時や、晦日に深夜まで帳合をして腹の減つた時に食つたのが例となつて、移轉や煤掃の日と晦日の夜には必ず食ふものとなつた、又江戸では移轉の日に兩隣と向ふ三軒の家へ、蕎麥を配つて、細く

長くお交際を願ふと云ふ印だ抔と云ふが、實は自分の處で飯の代用に買つて合食から其の一部分を近所へも贈ると云ふ意味に過ぎないのである。

饂飩は、唐曰不托。宋曰餺飩。凡以麪爲食。煮之者皆謂湯餅。又た語林に有魏文帝與何晏熱湯餅。即是索餅也。始於漢魏之間也。索餅と云ふのは、素麪のことである。そしてみると、素麺も饂飩も元は支那から習つたもので、蕎麥はまたそれを學んだものであるに相違ない。現今でも、饂飩、素麺、蕎麥の三つを總稱して麺類と云つてゐる。支那で云つた湯餅と云ふのと同意義の樣である。昔から京阪は、饂飩本位、江戸は蕎麥本位であつたもので、夜商でも、京阪の夜啼饂飩、江戸の夜鷹蕎麥と云つた樣なものである。其後、饂飩も蕎麥も都鄙到る所に流行して京阪に蕎麥の夜商もあれば、東京に鍋燒饂飩がある。然し、創製以來五六十年の間は、簡易食品として擯斥せられたもので加賀國大聖寺等は明治年間も其の風があつて、奥樣が蕎麥屋に行くと新聞に出ると云つた程であるが、漸次江戸趣味、蕎人等

の好事心から推奨せられ、文化年頃からは、上下の別なく一般に使用することになり、膳部の代用に供するとまでの盛況に達した。從て、盛蕎麥、笊蕎麥、掛蕎麥、玉子とぢ、南ばん、しゆッぽく、花卷蕎麥等種々の名稱がある。明治以後おかめ、月見そば、親子そば、大正になつてカレーそば等も出來た、江戸で有名な店は籔蕎麥と云つて駒込團子坂にあつて、裏に竹籔があつたからの名である。蕎麥と云へば籔と云ふ位流行したものであつた。今も尙ほ籔蕎麥と云ふのがある。外に麻布永坂に更科と云ふ蕎麥屋も有名で、前者が粗い粉を材料にするのに引換へ、後者は脂理の細かい色の白い粉を材料とするの相違がある。

昔は、野臺見世で頗る簡易に、夜間人足繁き街衢に、顧客を招いたものだ、客は立ちながら、短かい暖簾の裡へ頭だけ突込んで食つたものである。然るに、蕎麥の重んぜらるゝと共に、料理屋化して蕎麥屋の看板を出し、江戸は一町内に二三軒の蕎麥屋をみるに至つた。最近又支那蕎麥が流行で、東京などでは各町に一軒ぐらゐ

づゝ支那人が店を開いて居る。萬延元年のこと、江戸中の蕎麥屋、夜商をのぞいて三千七百六十三軒が連合して、値上げを幕府に願つたと云ふことを見ても、江戸は蕎麥流行の中心であつたことが分かる。今では勝手に値上げをしてゐる。

都市には、夏も冬も四季共に饂飩も蕎麥もあるが、關西、北陸の田舍町に行くと夏は饂飩冬は蕎麥とたてわけて、饂飩も蕎麥も一度に喰ふことはできない。十節記云。七月七日食二素餅一。何、昔高辛氏少子、七月七日去。其靈、無二一足一。成二鬼神一。於レ人、致二瘧病一。其靈、常食二麥餅一。故當二死日一、祭レ之。又食レ之、則令五人無二瘧病一矣と云ふことがある。素麺も饂飩も夏の食物として居るのは、此邊から出たのではあるまいか。兎に角、素麺は盆のものであることは、今も昔も爭はれぬ事實で、蕎麥は冬のものらしい。

蕎麥は、元代用食品であつて、田舍では客の顏を見ると直ぐ馳走に蕎麥を打つて出す、そして澤山食へ〳〵と云つて無理に强いるのを禮儀として居るが、食物の無

理強いは酒の無理強よりも客に取つては迷惑である、而も田舍の蕎麥は醬油が無味いので東京の樣には行かぬ、併し信州邊では茹で加減が上手で、而も殼を剝いて直ぐに粉に挽いたものを使ふから、香氣があつて結構である、東京の蕎麥は汁が甘味いが、粉が古いから香氣が無い。義民佐倉宗五郎は、大の蕎麥好であつた。今でも宗五郎の村では、蕎麥を食はない。而して、宗五郎の忌日には、宗五靈廟に蕎麥を供へて御祭するのが例になつてゐる。

元祿の忠臣、四十七士の一人、吉田忠左衞門は本所吉良邸の傍に蕎麥屋を開いて敵の容子を窺つたものだと傳はつてゐる。蕎麥と云ふものは何やら忠臣義士に緣故が深い樣に感じられるので、僕は蕎麥を食ふ時は、坐を正す、而して戴いてから箸をとる。

三　天麩羅

天麩羅と云ふと、今は誰も知つて居るから、何とも思はないが、面白い名稱で後には玉子を澤山衣に加へたのを金麩羅と呼んで居る、其起源は近くの事て百四十年餘り以前、即ち天明の初年頃に各地から江戸の繁華を目當に流浪して來たと同樣に大阪から利助と云ふものが江戸に來て、魚類の生肉を饂飩粉に卷て油の揚物を作つた。而して、夜業に辻賣をして見たいと、山東京傳に相談したのが始りである。

山東京傳は、其れは好からうと大賛成、利助が天竺浪人でブラ〳〵して居る人間だと云ふので、早速天麩羅と命名したばかりか、弟京山に其看板を書かせて、利助に賣り弘めさせたと傳へて居るが、以前から僧侶社界に揚物があり、魚肉を用ひたものは鹿兒島や大阪で云ふ附揚と呼んで居たのである。天麩羅と云ふも附揚と云ふも製法から出た名稱で、初めは野臺見世の夜見世であつたが、漸次江戸中の呼物となつて、江戸ッ兒の大歡迎を受け、さては專門の天麩羅屋も出來るに至つたのである。

和漢三才圖會に、阿蘭陀人、毎用一箇、爲常食。彼人呼、曰波牟。添之、吃羅加牟。羅加牟者、鰤魚肉、粘萬牟天伊賀油。豕油也爲脯切片者也とあるを見れば洋食は少くも三百年前から邦人に知られたもので、恐らく天麩羅の元祖利助も此の邊から考へ出したもので、やはり天麩羅は「フライ」の一種とみるべきものである。其他、環餅なども、糯粉を麻油で揚げたものである。乾菓子は、油煎が邦人の嗜好に適せなかつた處から、砂糖汁で揚げたのが始まりであるとのことである。して見ると、揚物は古來東西にあつたものとも云へ得るが、天麩羅と云ふ名稱は、山東京傳に始まつたものである。

明治二十年前後の頃であつた、上野山下の雁鍋と云ふ有名な料理屋の附近に、中野と云ふ名代の天麩羅屋があつた。上野へ行つたら中野の天麩羅を喰へと評判された位で、年中の利益は花見時だけで充分であつたと云ふことである。爺婆と息子一人、夥多の職人手傳を使つて、裕福に暮らしたものである。然るに、息子の代となつた處が、其嫁が餘りに始末家で、而も嚴しく雇人の手をつめた處から『シミツタレメ何をしやがるんだ』と云ふ職人の聲がする事になり、さては粗末な天麩羅を作り出した。そうなると、御客が承知しない、『何んだ中野も代変りになつたら、食へた天麩羅ではない』と云つて、客が二度とは來なくなる。この惡評が日一日と市中町から町へと廣がる。一年もたゝぬ内に、さすが名代の天麩羅屋も門前雀羅、來るのは紛れ客か、田舍者位が關の山、追々店が張りにくゝなつた。そこで看板諸共店を然る人に貸して見たが、それは最早遲蒔であつた。三年目には中野と云ふ看板は取り外されて、小洋食屋になつた、聞けば家も賣れたのだと云ふことであつた。斯くして、上野山下名代の天麩羅屋、中野も全く滅亡したのである。其嫁は、始末家だから、放埒な息子の爲めによからうと云ふので貰つたのだそうだが、其れが却つて仇となつたと、世間の評判であつた。それも何時しか年と共に忘れられて、今は誰も知つた人はない。

四　燒　芋

燒芋と云ふのは、薩摩芋を燒いたもので、江戸名物の一つである。薩摩芋は琉球の原產で、百八十餘年前、即ち享保二十年の頃に、青木文藏と云ふものが種を薩摩から取寄せて栽培し、而して救荒の適品として林大學頭に認められて、頗功せられたものである。燒芋の名地江戸市中でも、當時は盛に之を賣る程は產出されなかつたが、寛政五年になつて、本鄕四丁目の番小屋に八里半九里(栗)に及ばないが殆んど栗と同じ味だといふ意味）と云ふ行燈を出して、始めて燒芋を賣り出した。次で、小石川の白山前では、十三里（九里四里甘い、十三里といふことは今でも人は知つて居る）と云ふ、頗る奇拔な行燈を出して、同じ燒芋屋が出來た。それは〳〵實に廣告に妙を得たものである。珍らしい物があると云ふので、直に江戸人士のいたくも歡迎する處となつて、燒芋屋は江戸市中至る所に出來き各町內燒芋屋のあらざる

所なく大流行を見るに至つた。

頗る簡易な食物で、安價なる所から、無竈生活者流に便利なものとして、益々需用多くなり、燒方等も發達するに至つたものである。爾來一律に貫通し來り、今も尙ほ東京の名物燒芋は甘い。或は丸燒など云つて、丸のまゝに燒いたのが、特に甘いようである。明治の中頃までは、書生の羊羹と云つて、學生の茶菓子は大方此の燒芋であつた。現代の學生は贅澤なもので、衣食住から器物に至るまで、立派なものだが、昔の學生は所謂書生で、頗る質素なものであつた。衣至レ骨、袖至レ腕と云つた樣な風體で、綿服に木綿袴、絹布などは着るものだとも思はなかつた。

帶は兵兒帶、下駄は小倉緒の薩摩下駄、帽子は古きを尊ぶ、而して犬殺しの持つ樣な太いステッキを振り回し、大道狹しと活歩したのが、學生の典型とでも思つて居たかの如く流行したものであつた。さまで目立つた運動家と云ふのもなかつたが、擧動頗る活潑なものであつた。女性は大禁物、寧ろ汚れ物の樣に思つて居つた

時代もある。若しも女郎買をしたとか、女に關係があるとか云ふことが中間に知らるゝと、輕くて絶交、多くは半死半生の袋敲きを受けたものである。

平素相互の交際は頻繁なもので、來る往く必ず茶菓を出して高談、論議意のまゝである。茶は下宿屋から出す粗茶、菓子は書生の羊羹、筆立や机の抽出をさがして、漸くまどめた穴あき銅錢一錢で買はせたものである。

いかい書生のある中で、私の好きなは來島さん、三千九百萬人の頭にかゝる難儀をば唯身一つに引受けて、ぽんと投げ出す爆烈彈、直ぐさま自殺の勇しさ、人間一度は死ぬものよ、同じ死ぬなら國の爲め

此れは是れ、明治二十二年十月十八日、福岡玄洋社の來島恒喜が、時の外相大隈伯が、外人を我が法廷に列席せしめても、治外法權を除かうとした案に憤慨して、爆烈彈を外相の脚下に擲つて從容潔い自殺を遂げた後、九州一圓に盛に流行つた甚句である。當時著者は十五歳であつたが、甚句の通りに感心して、來島は偉いものだと思つた。斯うした氣風が、昔の書生の心底には潜んで居たものである。

來島は時に年三十、眉目清秀、謙讓にして沈默、酒も女も大嫌ひ、而も熱血多感智あり勇あり、少壯氣を負ふて國事に奔走し、不羈豪遇の快男子。常に朗々たる美聲をはなつて慷慨悲壯の詩吟をなし、精妙の調、人をして傾聽せしめた。嗚呼、來島恒喜、君の樣な書生は今藥にしたくてもゐない。僕は、書生としては來島恒喜、武士としては木村長門守重成が誰よりも好きだ。氣の鬱々したときでも、此の二人を思出すと、胸が陶然とする。

五　髪油

頭髪油には、昔は髩付油、伽羅の油、花の露など云ふのがあつた。太古は髪油はなかつたもので髪も其のまゝ明正天皇の寛永前後、即ち三百年程前、元龜天正の勇將たち、世は漸く太平となりし時、武家の奴が、頬髯を上方へ揉み上げて、面容を

剛くみせるべく、蠟燭の蠟の流れたのへ松脂を交ぜて、附けたのが髩付油の嚆矢であると云ふが變なことをやつたものである、耳の邊の生え下りの毛をモミアゲと云ふのは此の故である。

そこで、蠟燭の蠟に松脂を交ぜ、香料を少し加へて賣り出したのが、一大進歩で其當時名高かつた伽羅の油と云ふのである。然し、當時は專門の油屋ではなくつて、藥種屋から賣り出したもので、物堅い人などは、人の嘲りを恥ぢて一生付けなかつた者も多かつた位だから、初めは、伽羅の油も割合に賣れなかつたものだと云ふ。尤も、量も目藥貝位の瓶に一杯、此れを一年も二年もかゝつて費つた、若しも一二ヶ月で夫れを費ひ切ると、大評判をされたものだそうだ。

結髮したが油は附けなかつた、其代りに美軟かつらの粘液を取つて髮を整へたと書いた本が多い、けれども一千二百年前に斯う云ふ話がある。

行基上人が、七日間說法された、或る日聽問せる大勢の男女の中に、一人の女が

猪の油を髮に塗つて居たのを、上人は見つけて、「その血を付けてゐる女を去らしめよ」と云はれたので、其の女は恥ぢて立ち去つたと云ふ話があるから。髮油は銘々勝手な油や粘液を手當り次第に用ひた者らしい。

處が、伽羅の油が出來てから八九十年の後、虛榮贅澤の世となり名奉行大岡忠相の裁判事件が多かつた享保の頃になると、世はだん〳〵華美浮薄に流れ、寬永の頃は、江戸市中でも未だ湯島天神前に一軒、神田明神前に龜屋と他に一軒、芝に脊むしの喜左衞門、麴町に一軒、牛込の笹屋の僅か六箇所でのみ髮油を賣つて居つたのが、此の享保の頃になつては江戸中、伽羅の油を賣る所が俄に多くなつて、髩付油專門屋までが出來た。此れは需用者が多くなつたからで、女を初め男も盛につける樣になり、誰あやしむものもなく、而も大貝一杯を二三度に費ひ切ると云ふ世の有樣になつた。

斯くなつた原因とも見るべきは無論贅澤からであるが、實は此れより五十年程前

由井正雪事件落着後約十年なまぐら武士の根底を作つた、寛文の頃から俳優谷島主水、中村數馬、虎屋市之進などいふ河原乞食の輩が、伽羅の油店を出して皷吹したからだと云ふことである。斯うして、髪油の需要は年と共に多くなり。武士道は腐敗し、元祿十五年大石良雄等が偶々覺醒的壯擧はやつたが、油の種類は益々多くなつてきた。それでも、維新前後はさすがに使用者は減つたのであつたが、更に聖代の日進月歩と共に需用を頓に增加するに至つた。今も化粧品の廣告は俳優を利用してゐる。而して髪油の數は舶來、和製數限りなくある。芝宇田川町の脊蟲喜左衞門花露屋と云つた店の面白くできた口上書がある、當時の戯作者か俳人の手になつたものだらう。

おやかた、せむしの儀は代々いづれも樣の御ひいきにあづかり、伽羅の油といへば、せむしせむしと仰せ下さる……芝宇田川町に、小家なれども斯樣に居宅を構へ、代はかはれど名題はかはらず、花の露や喜左衞門でござる、油は白い黑いか

んかたで、やはらかい、あるひはこはく山吹ねり、いづれも牛蠟和蠟をつかはず唐蠟……匂ひは龍腦、麝香、白梅と申して白き梅の花……さて又練りまする油にやしほまんていか（猪の油の變名）をつかはず、松脂くすべを入れず、しらしぼり（さらし油のこと）極上で練り上げます……御用とござりませうずなら、極上匂入瓶付五兩入が三匁、匂不入が一匁五分、まつた一兩が二十四文、半兩が十二文、小貝が六文……

（五兩とは今の二十匁で、一兩が四匁に當る。三匁は銀貨の價で、今の五錢ほどに當る、一兩で二十四文とは重量四匁で代が二厘四毛とは物價の安いを驚くではないか。）

寶曆頃から流行した草双紙など見ると、種々の廣告がある。中にはしらがぞめくすり黑油、美玄香、おかほの藥おしろい美艶仙女香、一包四十八銅、（今の四厘八毛のことである）京橋南傳馬町三丁目坂本氏製など云ふ廣告もある。此れらは餘程進

歩したものだ、而して流行と共に種々のものから油も製造せられ、今の世となつては、油ばかりではない、總ての化粧品は贅澤も贅澤、何とも言ひ樣がない。吾人はせめて伽羅の油と云つた時代位にとめて置きたいものである。でなければ髮油全廢の方がよからうと思ふ、それでは女は困ると云ふならば髩付か椿油位にして置きたいものである、餘りつけると襟が汚れる。

六　耳垢取

此頃まで、耳や眼の掃除をする支那人が理髮店に雇はれてゐるのを見たが、昔も耳垢取と云ふことが一時流行つて、支那人から始まつて日本人も之を習つて商賣にした時代があつた。

丁度西洋料理や、支那そばゝ、最初外國の人が作つて賣つて居たのを、段々日本人が習つて眞似る樣になつたのと同じである、當時の矢師と云はれる大道の齒磨粉賣

が齒科の一班を心得て居た如く、耳の垢取も幾分か耳の病氣も心得て居つたらしい、耳科專門醫とでも云へば云へ得るかも知らん兎に角現代の人からみると甚だ馬鹿氣た商賣であるが、人世の競爭と云ふことに餘り重きを置かなかつた鎖國贅澤の世の中には、此樣な優長な事が不思議にも流行したものである。あまり面白い職業であるから、代表的に紹介して置く、元祿の前、貞享の四年に出版された江戸鹿子と云ふ本に、江戸神田の紺屋町三丁目に、長官といふ耳垢取の居たことが載せてある。無論日本人であつて支那人らしい名を付けたのである。京都の方にも、唐人越兵衞と稱した同業者が居たらしい。下つて三十年程後の享保二年に出た一代男後日と云ふ本には、松浦潟平戸といふ所に、長崎一官と名乘つた耳垢取が小さな草屋を借りて、京都で繁昌した、此れも耳の治療人であつた一官と云ふものゝ眞似をして、髮を惣撫でつけにしてゐたものがあると云ふことが書いてある。何れも耳垢取の服裝は、必ず唐人の風を眞似て、腰に瓢簞を下げてゐたのが特長であつたそうで

ある。而して昔の齒拔が選んだ樣に、往來のはげしい辻々に立つて居て、いくらかの工錢をもらつて通行人の耳の掃除をした丈のことである。彼の寶井其角の俳句に此の耳垢取を俳材にしたのがある。

觀音で耳をほらせてほとゝぎす

此の觀音は江戸で名高い、淺草觀音のことだらう、大方觀音さまの後邊で耳垢取に耳の掃除をさせてぶらり〳〵竹屋の渡しでも渡らうかとしてゐるときに、まつち山邊で時鳥が鳴いたと云ふ風流を詠んだものだらう。きたなく云ふと開いた口にぼたもちと云つた樣な調子だ、而して江戸時代其の邊の夏の夜景がなつかしく思はるるのである。淺草にも事實確かに有つたことだらう。然し、耳をほらせてと置いた所は、其角一流のもので、總て彼れの句は誰しも一讀其の技巧のきはどいのに驚かさるゝのである。俳道の流行した當時、義士を除いては優長な人ばかり耳垢取も流行つたものだらうと思はれる。元より耳垢取なんて、やはり贅澤の世の中だ。今は

耳垢取も耳垢をとらせるなんと云ふ優長なる人も居ないが、藝妓と自動車を乘り回して遊蕩する馬鹿者が多い、それも株券の暴落以來罪丸が上つたり下つたりしてゐる。未だ耳垢をとらせる位の處が、益もない代はりに害もないと思ふ。而して文藝の發達を招致して、生活の不安と死の脅威とを止め得て、精神的に人生を樂しむことが出來ることになるならば、耳垢取も寧ろ有益である。

今昔夜話 **生活味** 終